TOHOKU GAKUIN ARCHIVES

東北学院資料室

LIFE
LIGHT LOVE

Vol. 11
2012.4.1

寄　稿

『東北文学』に集った人々(二)　渥美　孝子

東北学院理工系教育機関の系譜とその人脈
—押川方義の創立理念—　鶴本　勝夫

〔資料〕手紙より見た鈴木義男と佐々木惣一　仁昌寺　正一

在仙の宣教師たち

東北学院と宮城学院両校の創立間もない時期の在仙の宣教師たち。1889年の撮影。40年以上にわたって、東京、仙台、山形などで伝道に尽力したモール夫妻、東北学院創設者のひとりのホーイ夫妻、シュネーダー夫妻、宮城学院創設者のブルボー姉妹とその幼い姪キティが見える。

学校法人 東北学院

泉キャンパス礼拝堂

CONTENTS

ごあいさつ

「東北学院資料室」第11号発行にあたって　星宮　望 ……1

寄　稿

『東北文学』に集った人々（二）　渥美　孝子 ……2

東北学院理工系教育機関の系譜とその人脈 ―押川方義の創立理念―
鶴本　勝夫 ……17

〔資料〕手紙より見た鈴木義男と佐々木惣一　仁昌寺　正一 ……29

東日本大震災における資料室の被災状況 ……35

所蔵資料紹介

熊三郎産髪包紙銘記 ……37

Sendai Theological Seminary in Account with W. E. Hoy, Treas.
（仙台神学校会計収支書）……38

2011（平成23）年度行事

東北学院大学、河北新報社・仙台商工会議所と包括提携 ……39

緊急シンポジウム「復活と創造　東北の地域力」開催 ……40

総合人文学科創立記念式典開催 ……41

中高大一貫教育事業に関する協定締結 ……42

東北学院創立125周年記念事業 ……43

時事（2011年４月～2012年３月）……45

受贈資料一覧（2011年４月～2012年３月）……47

東北学院資料室規程 ……48

東北学院の沿革 ……49

「東北学院資料室」第11号発行にあたって

東北学院 学院長　星宮　望

平成23年3月11日に発生しました東日本大震災によって被災された皆様に対し、心からお見舞い申しあげますとともに、当資料室に対しましても多くの皆様から激励のお言葉やご支援をいただきましたことに心より御礼申しあげます。

本院では、震災発生直後から教職員一同が一丸となり、生徒・学生・教職員の安否確認をはじめとして被害の調査、復旧・復興への対応、教育体制の緊急整備などに努めて参りました。そして、被災した生徒・学生への「授業料免除」の措置、「給付奨学金」による支援などの取り組みにより、現在、教育活動はほぼ正常化しております。

また、生徒・学生によるボランティア活動も活発に行われ、大学においては、「災害ボランティアステーション」を立ち上げ、全国的なボランティア活動の拠点として組織的に取り組んでおりますことはうれしい限りです。新約聖書の中に、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」との主イエスの御言葉があります。この御言葉にならうことを活動の中心にすえて今後も、「災害ボランティアステーション」が地域貢献の活動を展開してくれることを期待しております。

さて、当資料室が設置されておりますラーハウザー記念東北学院礼拝堂も大きな被害を受けました。資料室は半年間に亘って閉室を余儀なくされましたが、幸い、展示資料・保存資料の破損はほとんどなく、安堵しております。

このほど資料室設置当初から発行しております資料室年報も11号を出版することができました。渥美孝子先生には、「東北学院資料室」9号に引き続き、明治26年発刊の東北学院文学会機関誌「東北文学」に集った青年たちの軌跡、第二回目をご寄稿いただきました。本学名誉教授の鶴本勝夫先生には、本年創設五十周年を迎えた東北学院大学工学部開設までの系譜とその人脈について詳細に記録していただきました。さらに、「鈴木義男」に関する研究を進めております仁昌寺正一先生には「手紙より見た鈴木義男と佐々木惣一」と題して今回もご寄稿いただいております。

最後になりましたが、「東北学院資料室」に長年に亘ってご執筆いただきました本学経済学部教授岩本由輝先生が2011年3月31日をもって退任されました。岩本先生の当資料室におけるご貢献に対しまして深く感謝申しあげます。

東北学院資料室は、震災を経た後もこれまでどおり歴史と伝統を継承し、「建学の精神」を後世に伝えてまいりたいと思っております。ご協力をよろしくお願い申しあげます。

『東北文学』に集った人々（二）

東北学院大学教養学部教授
渥美　孝子

5. 木村久一をめぐって

⑴東北学院と大正デモクラシー

東北学院は、大正デモクラシーの推進を何らかのかたちで支えた人々を、数多く輩出している。ざっと数え上げても、栗原基、森本厚吉、杉山元治郎、鈴木義男、木村久一らの面々が思い浮かぶ。

栗原基（くりはらもとい）（明治9.2.15～昭和42.8.26）は、自らが表立って活動するということはなかったが、それに携わった人々をかげで支えた人物と言えよう。栗原が東北学院に入学したのは明治25年4月のことであった。新島襄の東華学校が閉校となったことから、東北学院本科二年に転入学することになった。同じクラスには岩野泡鳴や佐藤迷羊らがいた。栗原は後年、岩野泡鳴についての思い出の記を書き、往時の東北学院についても書き残している[1]が、在学中に『東北文学』に寄せた稿は見あたらない。明治28年6月東北学院を卒業し、第二高等学校に進む。熱心なクリスチャンであった栗原は、二高で親交を結んだ吉野作造、内ヶ崎作三郎、小山東助――後に「宮城県における大正デモクラシーの三羽がらす」と言われることになる彼らを、ブゼル女史（尚絅女学校校長）のバイブル・クラス（英語の聖書講義）に誘い、彼らのキリスト教入信に大きな影響を与えたことはよく知られていよう[2]。

東京帝国大学時代1900年（吉野作造記念館蔵）
前列右より小山東助、栗原基、内ヶ崎作三郎、後列右より小幡忠、吉野作造

明治31年、東京帝国大学文科大学英文学科に入学し、ラフカディオ・ハーンに学ぶ。明治35年7月卒業。大学を出る時、栗原基の英語講演に注目した神田乃武が学習院教授にと懇望したが「門閥の子弟はご免こうむる」とことわったという。広島高等師範学校教授となって九年間努めた後、京都YMCAの総主事を経て、大正4年に第三高等学校教授となる。昭和18年仙台に戻り、戦後は尚絅女学院などで教鞭を執る[3]。その長い教壇生活の間に、『英語発達史』（博文館、明治43.12）をはじめとする英語、英文学に関する著作のほか、植物王ルーサー・バーバンクを日本に初めて紹介したり、またフォスディックの著書の翻訳など、生涯にわたって基督教に関する翻訳著作も数多く残している[4]。

大正デモクラシーの関係で言えば、京都時代に三高や京大のキリスト教徒の学生たちの世話役をしたことが大きい。学生基督教青年会（YMCA）自体が「いわゆる大正デモクラシーの温床」といった様相を呈しており、栗原は彼ら学生の良き理解者としてその運動を好意をもって受け止めた。大正2年には、京都帝大や同志社大の学生たちを同人とするタブロイド版の雑誌『黎明』を出し（編集は古市春彦ら。大正9年夏の栗原の留学まで続く）、吉野作造や内ヶ崎作三郎、小山東助にも執筆を依頼した。キリスト教と民主主義が同誌の基調だった[5]。また、「友愛会」の京都支部（結成は大正6年）を支援して、例会に出向いて講演を行ったほか、大正14年12月の所謂「京都学連事件」においてとった態度も注目されよう。治安維持法違反第一号（治安維持法の最初の適用）で検挙された学生達の釈放に奔走し、また第三高等学校基督教青年会の初代主事でもあった栗原は、その青年会館（洛水寮）を京都帝大社会科学研究会（京大社研）の新たな合宿所として提供して、「社研」の再建のために密かに力を尽くした[6]。

さらには、娘婿の鈴木安蔵と吉野作造との橋渡しをしたのも栗原基であった。鈴木安蔵は学連事件に連座して京都帝大を自主退学した後、「第二無産者新聞」に関わったことでも検挙され、禁固刑を下される。昭和7年に出獄すると、吉野作造に私淑していた安蔵は、栗原を介して病床の吉野と面会。吉野から「明治憲法の制定史」について教えを受け、その視点と方法にしたがって『憲法の歴史的研究』（大畑書店、昭和8.6刊、即日発売禁止）を完成させ

る。これが戦後、「憲法草案要綱」をまとめることにつながっていくことになる[7]。

森本厚吉（もりもとこうきち）は、明治34年9月から明治36年7月までの約二年間にわたり、東北学院で教鞭をとった。森本については続稿で触れるつもりであるが、札幌農学校時代からの友・有島武郎と吉野作造とともに「文化生活研究会」を立ち上げ、月刊誌『文化生活』を刊行したほか、文化アパートメントの建設、女子文化高等学院の創設など、人々の生活面からの改善と女子教育に力を尽くしたことで知られる大正デモクラシーの実践者であった。

賀川豊彦らと日本農民組合を設立し農民運動の指導的立場にあった杉山元治郎（すぎやまもとじろう）と、弁護士として多くの治安維持法違反事件の弁護を引き受けて社会運動家たちを支えた鈴木義男（すずきよしお）については、東北学院大学の岩本由輝、仁昌寺正一の両先生によって詳細な研究が行われており、それらを是非参照されたい[8]。

ここでは木村久一（きむらきゅういち）を中心に、その事績を追ってみることとする。木村久一と言えば、「百科事典の木村久一」と代名詞のように言われてきたが、近年、その功績が見直され、とくに大正デモクラットとして再評価しようとの機運が見られるようになった。

註(1)栗原基「むかしの思い出」（「東北学院時報」167号、1951.9.20）、「栗原基氏の思出」（「東北学院時報」177号、1955.7.5）

(2)栗原基『ブゼル先生伝』ブゼル先生記念事業期成会、1940.11

(3)菊沢喜美子『思い出の父　栗原基』非売品、1969.7

(4)栗原基は大正9年から11年にかけての米国ユニオン神学校に留学の際に、フォスディックの知遇を得たという。（竹井一夫「栗原基―ラフカディオ・ハーンとH.E.フォスディックとのこと―」、『東北学院英学史年報』10号、1989.3）。

(5)宮本盛太郎「栗原基主幹『黎明』と栗原の二高の友人たち」（『キリスト教社会問題研究』37号、1989.3）。

(6)本庄豊「南山城の光芒―新聞『山城』の25年」（www.rakutai.co.jp/etc/yamashiro/file/050.html）より「京都学連事件―岡本八技太と栗原基」の項を参照した。

(7)鈴木安蔵については多くの研究があるが、原秀成「大正デモクラシーと明治文化研究会―日本国憲法をうんだ言論の力」（『日本研究』21号、2000.3）は、「日本国憲法が米国による単一の脈だけではなく、重層的に形成された」こと、なかでも最も大きな影響を与えたのが、鈴木安蔵が中心となってまとめ新聞各紙に掲載（昭和20.12.28）された、憲法研究会の「草案要綱」だったと述べている。

(8)杉山元治郎に関する岩本由輝氏の論考としては、「杉山元治郎と東北学院―大正デモクラシーの実践的体現者―」（『東北学院資料室』Vol.3　2003.12）、「杉山元治郎」（『大正デモクラシーと東北学院―杉山元治郎と鈴木義男』東北学院2006.10）、「日本農民組合設立に向けて」（『東北学院資料室』Vol.7　2007.12）、「杉山元治郎と日本農民福音学校運動（一）」（『東北学院資料室』Vol.8　2008.12）、「杉山元治郎と小高農民高等学校―古稀を過ぎての老耄の61年ぶりの復習を兼ねて」（『創設者の事績を通して見る東北学院の建学の精神』東北学院2010.3）、「杉山元治郎と日本農民福音学校運動（二）」（『東北学院資料室』Vol.9　2010.4）、「キリスト教と近代日本の知識人(1)―吉野作造・鈴木文治・杉山元治郎」（『キリスト教教育と近代日本の知識人形成―東北学院を事例にして―』東北学院2011.3）等がある。

鈴木義男に関する仁昌寺正一氏の論考としては、「東北学院時代の鈴木義男」（『東北学院資料室』Vol.4　2004.12）、「鈴木義男」（『大正デモクラシーと東北学院―杉山元治郎と鈴木義男』東北学院2006.10）、「弁護士時代の鈴木義男―河上肇の弁護―」（『東北学院資料室』Vol.7　2007.12）、「鈴木義男と吉野作造―一つの覚書―」（『吉野作造研究』第4号、2008.8）、「鈴木義男に関する資料」（『東北学院資料室』Vol.8　2008.12）、「弁護士時代の鈴木義男―平凡社『大百科事典』への執筆」（『杉山元治郎・鈴木義男の事績を通して見る東北学院の建学の精神』2009.3）、「弁護士時代の鈴木義男(4)―美濃部亮吉の弁護―」（『東北学院資料室』Vol.9　2010.4）、「鈴木義男」（『近現代日本人物史料情報辞典』4.吉川弘文堂、2011.3）等がある。

他に、宮川基「鈴木義男の治安維持法解釈」（『杉山元治郎・鈴木義男の事績を通して見る東北学院の建学の精神』前出）清水まり子「鈴木義男と生存権規定への関与について―研究ノート・その1：研究の概要―」、内海範子「鈴木義男の女性観に関する一考察―志賀暁子堕胎事件を事例に―」（ともに『キリスト教教育と近代日本の知識人形成―東北学院を事例にして―』前出）などの考察もなされている。

(2)-1 木村久一の東北学院時代・帝大時代

木村久一（明治16.7.5～昭和52.2.28）は山形県の生まれ。上ノ山で伝道にあたっていた東北学院出身の田村兼哉に英語を学んだのが縁で、明治33年5月東北学院にやってくる。労働しながら学問ができるというのが魅力であった。英語の試験だけで二年に編入をゆるされたが、労働会で新聞配達や印刷、牛乳配達などの仕事をしながらの勉強はなかなか大変だったようだ。その様子は木村自身の手になる「往時の思い出」に描かれている[1]。新聞配達の仕事のおかげで、東京の新聞・雑誌を読む機会にめぐまれ、「万朝報」や『太陽』『明星』『新声』などをむさぼり読んだというが、学業に関しては呑気にかまえて

いたらしく、数学の卒業試験に落第し、五年生を二回やることになる。

学生時代の木村久一

明治38年3月に普通科を卒業し、そのまま東北学院の専門部文科に進む。文科時代はサイプル博士のヘルパーとして、博士の日本語の勉強の手伝いをしたり、聖書講義や説教の際の通訳を務めたりした。サイプル博士はラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語に精通し、ドイツ語とフランス語にも堪能であった。久一はこの先生からドイツ語を習い、その勉強ぶりから語学の勉強の仕方というものを学んだという。また、ゲルハード先生夫妻も毎週金曜日に自宅でイングリッシュ・スピーキング・パーティを催してくれた[2]。このような環境にあって、文科時代は英語力に磨きをかけるとともに、文学会でも活躍することになる。

木村久一は明治38年6月の第5巻2号から二年半にわたって『東北文学』の編輯兼発行人となる。この

木村久一が編輯にあたった時の『東北文学』の表紙

頃の東北学院文学会ならびに『東北文学』は不振であった。文学会では空席が目立ち、『東北文学』への投稿には皆消極的で、無関心という空気が蔓延していた。その打開策であろうか、木村の担当した第5巻2号から表紙を一新し、巻頭に俳句の英訳を掲げ、モダンな雑誌に生まれ変わろうとしたフシが見える。しかしながら、この試みは長くは続かず、通号制に戻した第65号（明治39年11月）からは文字のみ表紙に戻ることになる。とはいえ、この号から木村は執筆を開始する。下に、文学会における木村の活動を書き出してみる（＊印を付したものは口頭発表や演目）。

邦文朗読「蜜の微笑」（明治36.4 第十二回文学大会）＊
バイオリン弾奏（明治37.1 文学会一月例会）＊
英語演説（明治39.6 文学会六月例会）で二等賞＊
「ロバート、ブラウニングを論ず」
（『東北文学』65号、明治39.11）
独語暗誦（明治39.11 文学会十月例会）＊
「小説と科学の交渉につきて」
（『東北文学』68号、明治40.10）
「蘆花『断崖』英訳」
（『東北文学』69号、明治40.12）

明治41年3月に文科を卒業した木村は東北学院の英語教師となる。『東北文学』71号の「雑報」欄には、4月の「新任英語教授木村久一氏の歓迎会」の記事が見えるが、本人によると、文科「三年生の二学期から」すでに「別科神学部に英語を教え」ていたということである[3]。この教師時代に発表したのが、次の三論である。

「プラグマティズムとは如何なることか」
（『東北文学』71号、明治41.11）
「英文学史の教訓（再び自然主場文学を難ず）」
（『東北文学』72号、明治42.2）
「エンスウジャムズを論ず―ドンキホテ式スピリットの足らざる人々にさゝぐ―」
（『東北文学』73号、明治42.7）

『東北文学』に発表されたこれらの論は、自らの方向を見定めていく軌跡をも示していて興味深い。イギリス・ビクトリア朝の詩人ブラウニングを扱った最初の論**「ロバート、ブラウニングを論ず」**は、まだ生硬な文章ではあるが、英文学の広汎な知識を動員しつつ24頁に及び、それでも末尾に「（次号完結）」と記されており、大作として目論まれたものであった。木村がブラウニングを評価するのは、彼が「人生の詩人」にして「思想の詩人」であること、その思想が「宗教的思索」を土台としていることである。「真詩は宗教的思索を離れて、到底不可能」と考える木村にしてみれば、当時隆盛の自然主義文学は受け入れ難いものであった。**「小説と科学の交渉につきて」**では自然主義のマニフェストたるゾラの「実験小説論」を否定し、**「英文学史の教訓（再び自然主場文学を難ず）」**では、日本の自然主義文学は「人生を、温顔視せず」して「同情なく慈悲なく冷酷な侮蔑した眼で人生の事相を見る」もので、つまるところ「青年男女の肉情挑発を目的とした醜的文学の羅列に過ぎぬ」として、これを切り捨てて

いる。

とはいえ、木村はゾラ批判の過程で、小説と心理学の交渉という問題に着眼していくことになる。ゾラが説く「実験科学の研究を応用せる小説」は、人間が「同一の境遇の下に必ず同一に行動するものにあら」ざるがゆえに「明らかに謬見」ではあるが、小説に「多大なる利益を供せる一科」としての「心理学」の功の部分は認めている。そして、この論文で心理学者として言及したウイリアム・ジェームズについて、その思想の概要をまとめたのが**「プラグマティズムとは如何なることか」**である[4]。

当時、一部の教会機関新聞等はプラグマティズムを危険視し警戒していたが、木村はジェームズの所論に「理ありとする」立場をとる。プラグマティズムとは要するに、世界は「人間が作れるものなり」とし、「真理」は「相対的便宜的暫在的のもの」であって「人間に及ぼす効果により割り出さる」と見なすところの結果と実用を尊ぶ哲学と概括する。それは諸々の学説を「一時便宜」のものと見なすことにもつながり、その意味においてこれを肯定するが、宗教に関する議論の「薄弱」――外界にある何物かに与えられているが如く感ぜられる経験の理由を説明できていないこと――を難点とするというかたちで論じている。

「エンスウジャムズを論ず―ドンキホテ式スピリットの足らざる人々にさゝぐ―」は、ツルゲーネフの有名な分類、ハムレット型とドンキホーテ型の人間のうち、ドンキホーテタイプの人間とは心理学上の「サビステビリティ」（暗示感性）の強い人であるとし、そのあり方の効用を説く。芋を喰っても肉を喰った気でいられる、自分の妻はこれ天下絶世古今随一の美人、自分の職務の如き立派な面白い職務は決してないと思う。そうやってこの世を愉快幸福に送るドンキホテ式スピリットのすすめを、青年に向けて語ったものである。

以上、東北学院時代に書いたものにやや詳しく立ち入ったのは、木村久一の関心が、文学に関する知識から心理学へと向けられていく必然の一端が垣間見えるように思うからである。かくして明治42年10月、東京帝国大学文科大学哲学科に入学、心理学を専攻することになる。これ以後の木村久一については、福家崇洋「大正デモクラシー下の心理改造【一九一〇年代における木村久一の軌跡と思想】」[5]が詳しい調査と考察を行っており、大いに啓発されるところがあった。是非参照されたい。

木村は、帝大在学中から『心理研究』（明治45年1月創刊、日本ではじめての心理学専門誌）への旺盛な寄稿を開始する。［資料三］として付した「木村久一《執筆一覧》」を参照されたい[6]。「精神分析の話」「秘密観破法と抑圧観念探索法」などの諸稿は、大槻快尊とともにフロイトとそれ以後の「精神分析学」の日本への紹介の、最も早い方に属する。それゆえ、「応問」というかたちで読者の質問に答えたり、他の論者によって参考文献として数え上げられることになる。一方で、「天才教育論」や「英才教育の話」といった、後に『早教育と天才』にまとめられる仕事にも着手している。心理学研究会の会員名簿によると、大正2年末の会員数は287名。その中でこれだけ頻繁に誌上に登場していること自体、当時の心理学分野における木村久一の存在感を物語るものと言ってもよいのではあるまいか。

また、帝大時代のことで特筆しておくべきは、学生生活を帝大基督教青年会で過ごしたことである。青年会のメンバーたちとの交友、とりわけ星島二郎との関係は大きい。星島二郎は自身の回想に、次のように書いている[7]。

> **明治四十五年、東京帝国大学法科に入学のため上京したが、石井十次翁の勧めにより阿部磯雄先生や内ケ崎作三郎先生のやっておられたユニテリアン教会に入会した。さらに帝大基督教青年会宿舎に入舎し、千駄木町の寮に入り、木村久一・森戸辰男・橋本寛敏・古野周蔵・山本亀市君などの諸君と同宿の時もあった[8]。**

ここに名をあげられている橋本寛敏も東北学院出身で、第二高等学校から東京帝国大学の医科に進み、後に聖路加病院長となった人である（橋本寛敏についても次回の稿で触れたいと思っている）。木村は大正3年12月、青年会で知り合った星島二郎と追分町に一軒家を借りて住む。この追分町の家が、後に星島が出した雑誌『大学評論』の大学評論社となる。こうした星島との交友が、言論人としての木村久一の形成に大きく関わっていくことになる。

註(1)木村久一「往時の思い出（花輪庄三郎編『東北学院七十年史』1959.7）

(2)このイングリッシュ・スピーキング・パーティは「フライデークラブ」と名づけられた。『東北文学』第66号の「雑報」欄によると、明治38年から続くこの会は、毎週金曜日の週会と月１回の月会を持ち、39年の文科二年生はゲルハード宅、三年生はスタイナー宅にて会合をした。学生達の英語をなんとかものにしようとの先生たちの配慮であった。

⑶木村久一「往時の思い出」（前出）

⑷仁昌寺昌一「大正デモクラットとしての木村久一」（『ウーラノス』№19　2005.5）には、この論文が「河北新報」大正9.5.27の記事で「二十歳前後の一書生が執筆したものとは到底思えぬ程堂々たるもの」と高く評価され、「高山樗牛の再来」とまでいわれたことが紹介されている。

⑸福家崇洋「大正デモクラシー下の心理改造【一九一〇年代における木村久一の軌跡と思想】」（『社会思想史研究』34　2010.9）

⑹［木村久一《執筆一覧》］は現時点で判明しているものであって、まだまだ見落としがあると思われる。

⑺星島二郎「回想　日比谷のかどの『中央法律相談所』」（「政治と人」刊行会編『一粒の麦―いま蘇える星島二郎の生涯』広済堂出版、1996.11）

⑻木村の大学時代の基督教青年会宿舎は台町にあった。木村の卒業と同時に青年会は千駄木町に移り、木村も下宿に移ったので「同宿」とは言い難いが、下宿が近くだったので、食事は青年会の食堂でし、泊めるもらうこともあったという。（木村久一「石田君の思ひ出」、『開拓者』1919.11）

⑵-2 麻布中学校時代の木村久一

大正2年7月、帝大を卒業した木村久一は、麻布中学校の英語・英文学の教師となる。福家崇洋によると、大正3年1月頃には、静岡県の沼津駿東女学校（麻布中学校と同じく江原素六が創立）の臨時校長として赴任し、9月に東京に戻って聖学院神学部講師となり心理学や論理学を担当したという[9]。東北学院で同級だった金矢武吉は、大正5年の木村久一の消息を、「麻布中学の英語教師として育英の事業に従はれ、傍ら青山女学院及瀧の川神学校に倫理を教えてゐらるゝ」と伝えている[10]。この大正2年から大正6年の早稲田大学赴任までを、一括して麻布中学校時代と呼ぶことにする。この時期の活動は、**1** 心理学に関する専門的研究、**2** 教育に関する紹介と見解、**3** 小説や文学に関する発言、**4** デモクラシーについての発言、の４つに分類することができよう。

1 の代表的著作は、『心理研究』に五回にわたって掲載された**「精神は何物なりや」**である。大学の卒論「精神の本性」をもとに書かれたと推測されるこの論文は、物質世界の成立から説き起こし、細胞の代謝作用、脳や意識、身体といった問題、はたまた古今の哲学者の思想等、多側面から検討を加えて「精神」を定義し、霊や力という偶像崇拝にいたる現代に警鐘を鳴らすという構造をとっている。

2 の代表は、言うまでもなく**『早教育と天才』**（大正6.4）の刊行にある。この成立事情については、

木村久一著『早教育と天才』

木村が「早教育に対する非難に答ふ」（『心理研究』大正7.7）に記している。概要はこうである。明治42年、帝大に入学した年の秋、週刊Literary Digest にサイディス（ハーバード大学を十五歳で卒業した少年）の記事を読んで関心を持ち、「米国に居る友人」から父サイディス博士の『俗物と天才』などを送ってもらい、その教育法を『心理研究』に紹介した。すると読売新聞の記者が取材に来て、その記事を見た読者から「早教育」について詳しい紹介を求める手紙が来た。そこで、『心理研究』に紙面を貸してもらって数回連載したところ、多くの反響があったので、心理学研究会出版部の提案により一冊にまとめて刊行する運びとなったというのである。木村自身、その意図は必ずしも「天才」を作ることではなく、子供のもって生まれた天賦を十分発揮させるために早教育の必要性を主張するものであったと語るが、福家崇洋は「その真の意図はF.ゴールトンらの人種改善論を批判することであった」とし、サトウタツヤは「教育の価値を遺伝主義とは逆の方向に強調したのが早教育という考えであり、それを日本に紹介したのは木村久一であった」とその意義を指摘している[11]。『早教育と天才』の端緒は、東北学院時代の自然主義文学における遺伝と環境についての論議にあったのかもしれない、と想像してみたい思いに駆られる。

3 の文学に関する発言は、東北学院時代から一貫している。『開拓者』に掲載された**「学者の領分」**（大正4.10,11）は、岩野泡鳴の離婚・結婚問題（早く言えば、ふしだらな男女関係）について、小説家とはそういうものだという物わかりの良い態度をとる桑木厳翼、鹿子木員信両博士に対して、「道徳的義憤」に欠けた「穏健病」と非難し、**「文士過剰論」**（大正5.7）でも「文士の品性」を問題にしている。これまた、東北学院時代に『明星』と『新声』の「けんか」が「面白くてよく読んだ」という――当時、与謝野鉄幹に対する誹謗中傷の書『文壇照魔鏡』をめぐって両誌が「けんか」し、この事件から派生して「文士品性論」が盛んに行われていた――ことを想起させる。木村は、大正3年から5年にかけて、

キリスト教系の雑誌『開拓者』や『六合雑誌』を舞台に、**「古井戸物語」**や**「宮参り」**など何編かの小説を発表している（「執筆一覧」参照）。いずれも、キリスト教の人物にまつわる物語、あるいは信仰ということを核にした柔らかい文体の短編であるが、それは、東北学院時代の主張であった「道念」や「宗教的思索」を土台とする小説の、彼なりの実践であったと言えよう。

4 のデモクラシーについての発言は、吉野作造の「憲法の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」（『中央公論』大正5.1）を承けて開始される。2月12日、第四十回心理学通俗講話会において、木村は吉野作造に対する深い尊敬の念を示しながらも、あえてこの吉野の論を踏み台として「心理学上の」議論をするとして、自己の見解を述べた。その講話を要約した談話記事が**「民本政治の心理」**（「新理想主義」大正5.2.25）であり、講話の内容を稿に起こしたのが**「デモクラスイの心理」**（『六合雑誌』大正5.4）ならびに**「デモクラシーの心理」**（『心理研究』大正5.6）である。吉野はデモクラシーの二綱領として、第一に民本政治の目的が「人民の利益幸福」のためでなければならず、第二に政策の決定は「人民の意向」によるものでなければならないと言っており、これはリンカーンの演説を想起させる。しかしながら、

> **吾々心理学者から見れば、デモクラスイの一番大切な要領は、政治学者の見解とは反対に、for the Peopleと云ふ事でなくてby the Peopleと云ふ事である。**

と述べる。なんとならば、人間は成長する生き物だからである。モンテッソリーの著作に、玩具のショベルでバケツに砂利を入れる遊びをやめようとしない子供を連れ帰ろうとして、バケツを砂利で満たしてやる乳母の話が書かれているが、それが子供の望むところでないように、無意識のうちに自分の能力の生長発達を求める本能の衝動を見逃して、どんなに上からの仁政をしても人民を満足させることはできない。人類の歴史が解放運動の歴史であることも、そうした人間の心理に由来する。したがって、たとえ「人民の利益幸福」の為の政治であって、それが「永久に保証」されていたとしても、その政治が少数の特殊階級の行うものであれば、それは悪政である、と断じている。

『心理研究』に発表した「デモクラシーの心理」では、さらに「後記」が付されていて、天皇親政を主張する上杉慎吉の論（「我が憲政の根本義」、『中央公論』大正5.3）に対して、

> **人民が自身で国務を処理して、敢て君主に世話や厄介をかけないでこそ、結構な国民ではないか。**

と反論し、民治主義すなわち政党政治でなければならないと説いている。吉野作造はこの木村の主張を受け入れて、深くその「示教に感謝する」と応え、自己の論の修正を行った[12]。これを契機に、木村は大正デモクラシー運動の渦中に身を投じていくことになる。その舞台の一つを提供したのが『大学評論』であった[13]。この雑誌について、『六合雑誌』（大正6.1）の「編輯の後」が、「星島二郎氏は木村久一、古市春彦氏等と共に今度『大学評論』といふ月刊雑誌を発行した」と伝えている。星島が出資し、友人たちに呼びかけて、雑誌のサブタイトルである「社会と学生の連鎖」を企図したものであったが、木村はその中心人物の一人であった。創刊時の主筆は小山東助（当時、衆議院議員）、編輯人は古市春彦、編輯スタッフは学生たちが担当した。この同人メンバーには木村久一のほかにも東北学院出身者としては有川治助がいて、多くの論文を書いている[14]。後に栗原基も寄稿者の一人となった。

註(9)福家崇洋「大正デモクラシー下の心理改造」（前出）による。なお、木村久一自身は、沼津に行った時期を大正3年1月から3月末までとしている（「石田君の思ひ出」前出）。

(10)金矢生「訪問紀行（二）」、「東北学院時報」1916.6.1

(11)サトウタツヤ「戦前期・戦時期体制と日本の心理学―優生学・軍事・教育との関わりを中心に―」（『立命館人間科学研究』4号、2002.11）

(12)吉野作造「民主主義の意義を説いて再び憲政有終の美を済すの途を論ず」（『中央公論』1918.1）

(13)『大学評論』については、太田雅夫「星島二郎と『大学評論』（抄）」（『一粒の麦―いま蘇える星島二郎の生涯』前出）が精査考察しており、それを参照した。

(14)有川治助（1887.4.5～1932.3.22）の履歴については、東北学院で同級だった木村久一が「故有川治助君」（「東北学院時報」1932.10.5）に詳しく書いている。有川は東北学院から第二高等学校へと進み、木村より一年遅れて明治43年東京帝大英法科に入学。基督教青年会で木村、星島と一緒になる。帝大卒業と同時に弁護士となるも、性格的に向いていないとして辞め、大学院で法学研究をしながら夜学校でロシア語を学ぶ。大正7年、朝鮮銀行東京支店の調査部に職を得る。『大学評論』同人として盛んに執筆するのは、この前後のことである。同誌にロシア革命のことを中心に13編を書いている。大正12年、

関東大震災で調査部が縮小されたことから、朝鮮銀行を退いて著述に専念。著書に『ヘンリー・フォード』（改造社、1927）、『ジョン・ワナメーカー』（改造社、1929）、『ジョン・ディ・ロックフェラー』（遺稿、友人がまとめ1939年に改造社より刊行）等の伝記がある。

⑵-3 早稲田大学時代から木村事件まで

大正6年6月、木村久一は早稲田大学の講師となる。担当は「英語、哲学及心理学」であった[15]。早稲田大学着任後は、その持論を、社会の現実に即してより直截に展開していくことになる。

大正期の雑誌は、その殆どが民主主義を掲げていたと言ってもよいであろうが、特に大正デモクラシーの論陣を張ったものとしては、既存雑誌では『中央公論』があり、『中央公論』から派生した『新公論』があり、また『第三帝国』（大正2.10石田民治により創刊、のち『新理想主義』と解題）、それに『大学評論』が加わりと、以下、幾多の創刊をみることになる。木村久一はこれらの雑誌に執筆したほか、大正デモクラシーに関わる団体に次々と名を連ねていく[16]。下に書き出したものと「執筆一覧」とを参照していただきたい。

大正6.1　『大学評論』創刊（星島二郎）
創刊当初からの同人。3巻2号（大正8.2）からは主筆をつとめる。

大正6.10　『中外』創刊（内藤民治）
創刊号から執筆

大正7.12　黎明会（吉野作造、福田徳三ら）結成
結成の呼びかけに応えて当初から会員となる。

大正8.2　『我等』創刊（長谷川如是閑、大山郁夫ら）
寄稿

大正8.3　『黎明会講演集』創刊
第一回講演から参加

大正8.6　『解放』創刊（麻生久）
寄稿

大正8.6　文化学会（島中雄三）結成
メンバーは『第三帝国』寄稿者や早大関係、黎明会会員ら。木村も名を連ねる。

大正8.8　啓明会（下中弥三郎）結成
小学校教員を中心とした日本初の教員組合団体。賛助会員として加わり、講演も行う。

大正8.9　建設者同盟（浅沼稲次郎）結成
民人同盟会を脱退したメンバーによって結成された早稲田大学を中心とする学生運動団体。翌9年5月から毎週２回の研究会を開催。木村は「ソビエト研究」を担当。

大正8.10　『啓明』創刊
寄稿

大正9.5　文化生活研究会（森本厚吉、有島武郎）組織
木村は「文化生活研究」という月刊通信教育叢書の「家庭教育」を担当。

大正9.11　コスモ倶楽部（堺利彦、権熙国、宮崎龍介）結成
創立期の会員

これらを舞台に、木村は教育令や教員待遇の問題、学者のあり方、官僚、政府に対する批判、そして国民自身の心理改造の要求へと幅広く啓蒙的活動を展開していくのであるが、それは、ある種危険な方向性をはらむものであった。そのいちいちに触れることはできないが、たとえば、**「新国民心理の創造」**（大正8.3）や**「民衆の世界改造」**（大正8.10）では、明確に「反戦」を打ち出している。民衆は、資本家の懐と軍閥の畑を肥やすだけの武力信仰から醒めて、「正義」が非常な力となることを今回の大戦から学ばねばならないと説く。**「不純なる人種的差別的待遇撤廃の要求」**（大正8.4）では、日本が米国における日本移民の排斥に抗議しながら、一方で侵略的侮蔑的な対支那政策を行っている矛盾をつき、「得手勝手」と批判する。『新公論』（大正9.1）に書いた**「バ×トラ×ド・ラ×セ×の哲学」**が題名からして伏せ字なのは、それが危険思想と見なされるおそれがあったからである。内務省警保局編集「最近出版物の傾向と取締状況（大正10年1月調）」は、バートランド・ラッセルの思想学説を「一昨年のマルクスを見るが如し」と警戒し、木村久一の名もあげている。

大正9年1月、森戸事件が起きるや、木村は**「思想言論の自由」**を『大学評論』や『黎明会講演集』に発表する。木村は森戸辰男とは東京帝国大学基督教青年会で一緒だったが、森戸個人の擁護というよりも、「思想言論の絶対的自由」の擁護、「制限附きではない、絶対自由」が木村の主張である。

> **今度の事件を見るに、少なくとも経済学部の教授連は、学者の使命と天職を自覚して居ないことを暴露した。若し彼等が森戸助教授の論文を、危険とも有害とも認めないと云つて、頑強に固守したなら、思想言論の自由が立派に擁護されたのである。彼等は思想言論の自由を態と棄権した者である。**

と思想言論の前衛にいるはずの帝大教授連の無自覚を嘆き、政府に対しては、「思想として説く限り」

においてこれに干渉せず、自然淘汰に任せるほうがかえって安全だと説いている。だが、その当の木村自身が検挙され、早稲田大学教授を罷免されることになる。

大正9年5月、大学評論社に捜査の手が入った。太田雅夫はその経緯について、次のように記している[17]。

> **一九二〇（大正九）年五月二三日、『大学評論』編集人信定瀧太郎と早坂二郎が、露国過激派の宣伝文を印刷配布した廉により検挙され大学評論社が捜査された。しかし取調べがすすむにつれて主筆木村久一（早稲田大学教授）が尼港事件に関連し軍事郵便として朝日新聞に送られきた「反戦の檄」の写しを、朝日の記者からもらい、下中弥三郎（平凡社々長）の主催する新思想研究会の席上紹介し、それを信定が謄写印刷して配布したことがわかった。そして「反戦の檄」の最後にスローガンとして、「一、戦争の反対、二、ミカドを倒せ、三、世界の無産者団結せよ」が書かれてあったので、六月二二日には、主筆木村久一・編集委員松沢兼人・大学評論社記者児玉治雄が収監されることとなった。この木村事件は、不敬罪および過激派思想の宣伝がともなったため検事局は森戸事件以来の緊張を示した。**

弁護にあたったのは、森戸事件の場合と同様、片山哲、星島二郎が開設した中央法律相談所である。第一審判決は大正9年7月31日、不敬罪で懲役一年六箇月というものであった[18]。東京控訴院に控訴したが懲役一箇年の判決が出され、大審院に上告する。しかし、どういう理由からかはわからないが上告を取り下げ、木村は東京監獄に送られることになった。大学教授としては初の不敬罪の適用、初の懲役刑服役となった。

ところで、上に引用したなかに、『大学評論』編集人として早坂二郎の名があるが、早坂二郎も大正4年3月に東北学院普通科を卒業し、二高から東京帝大に進んだ東北学院出身者である。『大学評論』の編集人をしていたこの時は法科大学政治学科の学生であり、帝大基督教青年会舎主をつとめていた。早坂二郎は木村事件では起訴猶予となり、この事件の後、大正10年に大学を卒業、東京朝日新聞社に入社して外報部に働く。早坂は「東北学院時報」（大正11.1.1）に、東北学院同窓会「東京支部の近況」を伝える中で、木村久一の出獄を伝えている。

> **最後に木村久一君が最近仮出獄されたことを御知らせ致します。同君は昨年五月研究上の事から禍を買ひ、不敬罪の罪名を得、本年春入獄されましたが、固より事実はそんな罪ではなく現行法制上罪に陥れられたと云ふのが本当で、一年の刑期が半分足らずで借出獄の恩典に浴したのも故ありと云ふべしです。氏の為に健康を祝します。**

実際、大正10年11月12日に東京で行われた同窓会総会の出席者に木村久一の名がある。案外早くに出られたため、獄中の木村を励まそうと友人たちが企画した『新日本の建設』の刊行は出獄後になってしまった（岩波書店、大正11.6）。この本だけでなく、大正10年というタイミングで、大鐙閣（『黎明講演集』や雑誌『解放』の出版元）から『早教育と天才』改訂増補版が出されたのも、評判の高かったこの本を刊行することで、木村久一を支援するという意味合いがあったのかもしれない。

出獄後のことは詳らかでないが、おそらく星島二郎の配慮で隆文館に迎え入れられたと考えられる[19]。隆文館は、早稲田大学と政友会の人脈を背景に草村北星が明治37年に創業した出版社であったが、大正9年に草村と同郷の代議士・松野龍平に委ねられ、さらにこの頃は星島二郎（星島も大正9年初当選の代議士）の手に経営が移っていた[20]。その隆文館からも大正13年6月『早教育と天才』の再版が出されている。

註⒂『早稲田大学百年史』第二巻、早稲田大学出版部、1981.9

⒃このほかに、木村は「社会政策学会」にも参加。「社会政策学会」が全国の農民生活調査を行うことが報道された「東京朝日新聞」（1919.7.30）の記事に、山陽道四国は星島二郎、東北地方は木村久一が担当と出ており、その調査報告として、11月同紙に「木村久一主幹 農民生活調査」が七回にわたって連載されたらしい（未確認）。なお、大正デモクラシーの代表的雑誌である『改造』（1919.4創刊）には木村の寄稿は見あたらない。

⒄太田雅夫「中央法律相談所と『中央法律新報』」（社会問題資料研究叢書第二輯『中央法律新報』第一巻上、東洋文化社、1972.12）。

⒅木村久一はこの時の体験から「世に検事の調取書なるものほど篦棒な物はない」と語り、検事の聴取と予審に弁護士を立ち合わせるべきことなど、裁判制度の改善点を記している（『中央法律新法』創刊号、1921.12.1）。

⒆関東大震災後の同窓生の消息をまとめた須藤鬼一「東京支部通信」（「東北学院時報」1923.10.25）に、「木村久一（隆文館）」とある。

⒇「古本夜話149草村北星、隆文館、川崎安『人体美論』」、及び「古本夜話151隆文館の軌跡」（http://d.hatena.ne.jp/OdaMitsuo）

⑵-4 平凡社時代の木村久一

昭和6年、木村は下中弥三郎に招かれ、『大百科事典』の編集長となる。大正3年6月に平凡社を創業した下中弥三郎は、大正8年民衆本意の教育と教育の自治を求めて「啓明会」を立ち上げる。先にも触れたように、木村久一はその賛助会員となった。いわば旧知の間柄であったが、それだけが招聘の理由ではない。経営破綻に陥っていた平凡社の巻き返し策として百科事典の刊行を計画した時、下中が編集長に適する人材として頭に描き得たのは、土田杏村と木村久一の二人だけであった。だが、土田杏村は病弱であったうえに実務を執ってくれる人でないので、結局木村しかいないと考えたという。木村は短期間にそんな大規模な計画を実行しようとするのは無理だと言ったが、下中の再三にわたる懇願に重い腰をあげることになった[21]。見てきたように、木村久一のカバーしてきた領域は広い。心理学、教育学、哲学、文学、労働社会思想に、海外の事情にも通じている。隆文館時代の編集経験もある。下中が白羽の矢を立てたのも、むべなるかなであった。木村久一のアイデアで、エンサイクロペディアの訳語に「事典」の文字を採用し[22]、編集長として「項目の決定、原稿の内容、釣合い、説明の難易」などに力を奮うことになった。七十余人の編纂者を束ね、多くの学者を動員して苦労を重ねながら、昭和6年11月『大百科事典』第1巻の刊行にこぎつける。索引を含む全28巻の完結は昭和10年10月のことであった。

その月報に11回にわたって書いた**「百科事典漫談」**[24]もまた注目すべき仕事と言えよう。「漫談」とは言いながら、プリニウスの『博物誌』から始まって、『ブリタニカ』、『ブロックハウス』、ディドロの『アンシクロペディ』、ツェッドラーの『百科事典』などの変遷を追い、まとめて読むと相当踏み込んだ大部のものである。その最後に木村は、百科事典の使命とは要するに「社会教育の一機関たること」と書いている。『大百科事典』の仕事は、学校だけが教育機関なのではない、とする木村の年来の教育理念に沿うものであった。

『大百科事典』はその後、すぐに新装版を出し、戦後、昭和22年版の刊行の際も、木村久一が主任格となって編輯した。この時は検閲のために何度もGHQに足を運んだという[23]。一方、昭和21年3月からは平凡社が出した雑誌『小天地』（のち『時代』と改題）の編集長をつとめて時評に健筆を振るい（「執筆一覧」を参照されたい）、昭和23年若い編集者と交代する。『平凡社六十年史』の巻末には、「役員・社員所属一覧（昭和49年4月1日現在）」が載っているが、そこには「顧問　木村久一」とある。その三年後の昭和52年、木村久一は九十三年の生涯を終える。晩年まで「社会教育」の現役を貫いた人生であった。

註⑵下中弥三郎「大百科事典の完結に際して思ひ出を語る」（平凡社『大百科事典』第27巻「大百科月報」1934.9）
⑵『平凡社六十年史』1974.6
⑶『平凡社六十年史』同上
⑷下中弥三郎編『百科事典の知識』（平凡社、1935.3）に収録

⑶小松謙助

木村久一と大きく関わりを持ち、「社会教育」に貢献した人物に小松謙助（こまつけんすけ）がいる。小松謙助（明治19.2.6～昭和37.1.28）は、福島県二本松町の商家に生まれた。小学校を卒業後、親の命で番頭に出されたが、十五歳の時、軍人になりたくて家を飛び出し、横須賀で海軍の試験を受ける。だが、体格矮小で不合格となり、呆然自失となる。その小松に、労働しながら勉学できる学校が仙台にあるからもっと勉強せよ、と大尉が紹介してくれたのが東北学院であった。来仙の時期は定かでないが、東北学院の「労働会名簿」に明治35年1月11日入会とあり、「教員会記録」の明治35年6月の記録には「普通科二年」とあることから、明治34年のことではなかったかと思われる。木村久一の二学年下になる。労働会では牛乳配達を担当し、「労働会日誌」によると、明治36年のクリスマスには木村久一と一緒にバイオリン演奏を行ったらしい。また、このクリスマスの時に、学院長のシュネーダー先生からサイン入りの日記帳をもらい、翌37年１月１日から晩年にいたるまで、ずっと日記を書き続けることになる[1]。シュネーダー院長の慈愛に満ちた人となりが生徒に与えた感化はよく語られるところであるが、小松謙助がいたずらをした時も、礼拝堂で共に神に祈り涙顔で許してくれたので、深く反省したという。

鈴木忠男 編・画『小松謙助絵日記』

文学会での活動としては、第三回卒業生文学会兼親睦会（明治36.10.28）でのヴァイオリン演奏「秋の嘯」、第十三回大会（明治37.2.29）で「英語

唱歌（Bumble bee.）」を四人で歌ったこと、『東北文学』には、石田真児との思い出を書いた「思出草」（4巻1号、明治37.3）一編が確認できる。ところが、普通科四年の明治37年7月小松は労働会を退会する。理由は分からない。その当時のことを木村久一が語っている[2]。

> **明治三十七年の秋、東大出の小林秀雄先生が来任したが、小松君はどういう関係からだつたか、労働会を出て小林先生の家の書生に住み込んだ。事件はその後のことだつた。**

「事件」とは、小松謙助の退学のことを指す。小松の日記に基づいて作成された『小松謙助絵日記』には、「三年生 幸徳秋水の非戦論に共鳴し、更に木下尚江の社会主義に同調、社会主義者となる。三八年舎監が居眠り中、そのヒゲを切り落としたり、乱暴して四年で退学、東京に出る」とあり、小松自身は「私は田辺君等とは異なつて、不良で盛んに社会主義運動などに先駆してゐたので、学校にも居耐れず、東京に飛出し」たと回想に書いている[3]。だが、東北学院の友人たちの見方は少し違う。木村久一は、自主退学ではなく、社会主義者となったことに驚いた学院側が小松ら四人の生徒に対して「何等かの処置をとつたものらしい」とし、小平国雄も「迫害され」たと受け止めている[4]。いずれにせよ、退学を余儀なくさせた背後に、「平民新聞」の読者というだけでブラックリストにのるという、時代の厳しさがあった。と同時に、軍人志望から一転、日露開戦に向けて盛り上がりをみせる時代にあって、非戦論に共鳴するや、社会主義運動に飛び込む小松の直情径行ぶりもまた見てとれよう。

明治38年3月、学院を退学して上京した小松謙助は、「平民新聞」に入る希望を持っていたが叶わず、東京府教育会事務員を勤めながら、夜は国民英学会及び早稲田大学講義録によって語学や政治、経済を自学自修する[5]。そうした苦労を重ねて5年目の明治42年、「万朝報」の入社試験に合格、社会部記者となる。しかし長くは居られなかった。小松の記事が社長の黒岩涙香の怒りに触れ、「明日より出社に及ばず」の通知を受けて退社。小松の才を惜しんだ「万朝報」の先輩・古島一雄[6]の推薦で、大正3年12月東京朝日新聞社に入る。この朝日新聞記者時代に木村久一の事件が起きる。

東北学院労働会以来の木村との交友は、東京においても続いていたが[7]、木村の検挙には、二人の交友関係が介在していたと思われる。大正11年頃の内務省警保局編『思想要注意人名簿』（翻刻・編集水沢不二夫）には、次のように記載されている。記載事項は、氏名・所属・要注意事項・本籍・現住所・職業・生年月日の順となっている（空欄の場合もある）。

> **木村久一／コスモ／無政府主義思想ヲ抱持シ大正九年至尊ニ対スル不敬ノ思想ヲ包含スル過激思想ノ宣伝文ヲ他人ニ閲読セシメ又ハ貸与シ不敬罪トシテ検挙セラレ受刑仮出獄中／山形県南村山群宮生村大字下住活一一一番地ノ一／明治一六年七月五日生**

> **小松謙助／社会主義思想ヲ抱持シ大正九年露領ヨリ東京朝日新聞社ニ御送シ来タル不敬思想ヲ包含スル警告文ト題スル過激思想宣伝文ヲ木村久一ニ貸与シタルモノナリ／福島県福島市本町一番地／東京市小石川区原町一一九番地／東京朝日新聞記者／明治一八年二月九日生**

これによると、木村が「『反戦の檄』の写しを、朝日の記者からもら」ったという、その記者が小松謙助ということになる。実際はどうだったのか、本人達の証言は今のところ見出せない。だが言うまでもなく、問題は、このような文を見せたといったようなことで逮捕したり、監視したりする官権の側にある。木村はデモクラシーの実現のために、人々の覚醒を促し、新たな思想制度を追い求めたのであり、小松は「平民社の理想と運動に共鳴した若い時代の夢と息吹き」が、「デモクラシーに共鳴・支援する生き方で蘇った」[8]のであったろう。二人は、ただ、良き社会への変革を望んで、ブラックリストに載ったのである。

「本書を木村久一君に贈る」と扉に書かれた『新日本の建設』（前出）は、小松謙助が中心となって編纂したと思われる[9]。星島二郎、片山哲、小松謙助の連名になる「序」には、友人同志の「君と君の御家族を慰めやうとの議」から、「在獄中に出版して差入れ、鉄窓裡の孤独と苦労を、一瞬時なりとも忘れて貰ふつもりであつた」が、先にも述べたように、木村の仮出獄には間に合わなかった。今、煩を厭わず、その目次を書き出してみる。

『新日本の建設』岩波書店、大正11年6月

法律改造の基点としての社会化／牧野英一
法律に現はれた維新の気分／穂積重遠
民法改造の根本問題／末弘巌太郎
新日本の意義／三宅雄二郎
東洋一のアナーキズム／吉野作造
日本再造の原則／杉森孝次郎
世界平和実現の三大関鍵／安部磯雄
国民思想独立の問題／阿部次郎
新日本建設と教育の改造／森本厚吉
新日本建設の一要素としての科学思想／木村徳蔵
社会教育に関する一考察／権田保之介
平等論と教育の機会均等主義／大島正徳
ロオドベルトスの地代論とリカルドウ／小泉信三
金融資本と社会問題／福田徳三
生存肯定と哲学否定／長谷川万次郎

この錚々たるメンバーが、木村久一と小松謙助のそれぞれの交流関係に連なっている。このうち、森本厚吉と木村徳蔵は、二人が東北学院時代に教えを受けた師である。星島二郎の『中央法律新報』の関係があり、牧野英一をはじめとする帝大関係者あり、吉野作造の黎明会会員も多い。長谷川万次郎（如是閑）は雑誌『我等』で森戸事件擁護の論陣をはった関係であろうか。ともあれ、これら大正デモクラシーを牽引する人々が、囚われの木村久一のために、「新日本の建設」というテーマのもと結集した、ということに意義があろう。

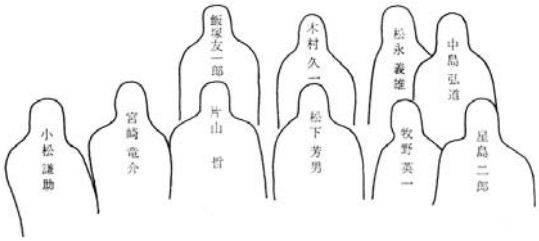
さて、小松謙助は大正9年8月、東京日日新聞（毎日新聞の前身）に移る[10]。学芸課長となるが、大正14年3月退社する。その理由は、木村久一と同じような事態に立ち至ったことからだった。

たまたま、毎日新聞学芸欄に掲載の本荘可宗氏の「宗教の価値と必要」の論文が不敬の文字ありとして東京地裁で取調べるという事件が起きた。その責任を一身に負うて毎日新聞を退く[12]。

そして、小松は記者生活に終止符を打ち、「社会教育」の道へと突き進むことになる。星島二郎は、後年、次のように回想している[13]。

森戸事件に次いで木村久一君の事件で、各社の社会部の記者がつめかけて来た当時の、君のするどい眼光を思い出す。でもあの事件故に君が社会教育の事業に飛込んだのである。

大正14年11月、小松は社会教育の普及振興を掲げて、財団法人「社会教育協会」を設立する。会長



『中央法律会』昭和29年11月1日（『中央法律新報』第一巻上、東洋文化社、1972.9より）
かつての『中央法律新報』の関係者は、「中央法律会」の名の下に、年に数回集まりをもった。その時の写真。

に阪谷芳郎を迎え、理事長には法学者で東大教授の穂積重遠、小松自身は常務理事に就任する。後援者には、朝日新聞時代の僚友緒方竹虎、美土路昌一をはじめ、親交のあった中央法律協会の片山哲、星島二郎、牧野英一、牧野良三、岩田宙造、また財界から正田貞一郎、明石照雄などがいた。こうした人脈の中には、木村事件が引き合わせたと言えるものもあろう。再び、『小松謙助絵日記』から引く。

大正十一年、日比谷の門の星島ビルで、星島二郎、片山哲経営の中央法律相談所は料金一件三円也の廉価で人望があつた。その法律新報の編集を手伝、仝人のようになり植原悦次郎と将棋ばかりやって居た。こゝで、牧野英一、穂積重遠、吉野作造、末広巌太郎、尾佐竹猛、草野豹一郎、中島弘道等の諸学者と懇意になつた。

「社会教育協会」の事業内容は、指導者向け『社会教育パンフレット』（のち『国民』と改題）、青年向け『民衆文庫』（のち『青年の文化』と改題）、女子青年団機関誌「処女の友」等の発刊、さらには青年学校向けテキストの『青年学校教科書』や『女子青年学習書』、『婦人講座』といった出版物のほか、講習会なども行なった。樋口秋夫「小松謙助と社会教育協会」は、「その発意には自身の勤労学生体験や独学経験、そして東北学院時代に感化を受けたキリスト教の影響も少なからずあったと思われる」と

指摘している[14]。

昭和17年4月には、高等女学校を卒業した者を対象にした東京家庭学園を設立する。理事長・学園長には穂積重遠が就任した（穂積の逝去後は牧野英一が就任）。これが現在の白梅学園の母胎となる。同時に、乙竹岩造を所長として、世界各国の社会教育事情を調査研究する社会教育研究所を設立する。戦後は、昭和20年穂積理事長の辞任を承けて小松謙助が社会教育協会の理事長に就任、28年には学校法人白梅学園を設立して理事長となる。

ところで、社会教育協会の刊行物には、東北学院の出身者が多く寄稿している。木村久一も社会教育文庫のシリーズに参加し、雑誌『国民』に稿を寄せた（「著作一覧」参照）。小松謙助の後輩にあたる鈴木義男は、鈴木自身の言から引用すると、「『社会教育』というようなことを誰も考えない頃、敢然として社会教育に挺身された。僕もその志を壮として、そのシリーズの中に『法律の社会化』を執筆した」という[15]。ほかに、労働会で苦楽を共にした小平国雄（牧師、小松は小平の代々木中部教会員）も、『社会教育パンフレット』に「英国のファッショ運動」「新大統領ルーズベルト」「唯物史観と基督教」などを書いている。

社会教育に一身を捧げた小松謙助は昭和37年1月28日、橋本寛敏の聖路加病院で息を引き取る。葬儀委員長は岩田宙造、司式は小平国雄がとり行い、星島二郎が友人役員を代表して追悼の辞を述べた。東北学院からは鈴木義男、大山良雄、小松武治、橋本寛敏、木村久一らが参列した。

註(1)残された膨大な日記をもとに作成されたのが、野地生記「故人の日誌から―小松謙助先生年譜―」（『社会教育に生涯を捧げた人―小松謙助を偲ぶ―』財団法人社会教育協会、1962.3）であり、手描きの『小松謙助絵日記』（編集発行人・鈴木忠男、1982.2.2）である。小松謙助の履歴の多くはこれらに依拠している。

(2)木村久一「小松謙助君の思い出」（『東北学院時報』192号、1962.5.15）。文中に出てくる「小林秀雄先生」は西洋史の教授として明治37年9月に東北学院に赴任、43年7月まで在職し、その後立教大学教授となった。

(3)小松謙助「故田邊恒氏を憶ふ」（『東北学院時報』1932.7.25）

(4)小平国雄「東北学院時代の小松兄」（『社会教育に生涯を捧げた人―小松謙助を偲ぶ―』前出）

(5)伊藤整は、この小松の苦学時代に、仙台出身でのちに作家、評論家として活躍する前田河広一郎が、小松謙助の神田の下宿に二月も滞在したというエピソードを書いている（『日本文壇史９』）。小松謙助の面倒見の良さと交友の幅を示すものとして興味深い。

(6)古島一雄は三宅雪嶺の「日本人」の記者をし、その後新聞「日本」に移って正岡子規と従軍、玄洋社系の「九州日報」を経て、明治41年万朝報社に入った。

(7)万朝報時代の小松を木村は訪ねており（木村久一「故人の思い出 木村迷羊さん」、「東北学院時報」1960.12.10）、労働会での旧交はそのまま東京でも継続されていた。

(8)小松隆二「星島二郎―日本の民主主義を先導した政治家―」（『地域と教育』第9号、白梅学園ホームページ）

(9)この本については、仁昌寺正一「弁護士時代の鈴木義男―平凡社『大百科事典』への執筆」（前出）に紹介されている。

(10)朝日新聞社で小松謙助と深い親交を結んだ美土路昌一は、小松が社会問題や労働問題を記事にして、スキャンダル本意だった社会面を庶民の生活に結びついたものにしたと、その功績を語っているが、朝日新聞退社の理由については、政治部長の排斥陳情などの清社運動をした「その直情が累したのではないか」と見ている。（「記者時代の小松君」、『社会教育に生涯を捧げた人―小松謙助を偲ぶ―』前出）

(11)「小松さんの思い出」欄（『社会教育に生涯を捧げた人―小松謙助を偲ぶ―』前出）

(12)野地生記「故人の日誌から」（前出）

(13)「小松さんの思い出」欄（前出）

(14)樋口秋夫「小松謙助と社会教育協会」（『地域と教育』創刊号、白梅学園ホームページより）

付記　今回、この稿を起こすにあたり、白梅学園の小松隆二理事長、樋口秋夫校長のご厚意によって、小松謙助に関する多くの資料を提供していただいた。記して感謝申し上げます。

渥美 孝子プロフィール　ATSUMI, Takako

宮城県生まれ。
上智大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。
四天王寺国際仏教大学講師、東北学院大学講師、助教授を経て現職。

〔資料三〕

木村久一《執筆一覧》

東北学院時代

1906年　「ロバート、ブラウニングを論ず」（『東北文学』65号、明治39.11）
1907年　「小説と科学の交渉につきて」（『東北文学』68号、明治40.10）
「蘆花『断崖』英訳」（『東北文学』69号、明治40.12）
1908年　「プラグマティズムとは如何なることか」（『東北文学』71号、明治41.11）
1909年　「英文学史の教訓（再び自然主場文学を難ず）」（『東北文学』72号、明治42.2）
「エンスウジャムズを論ず―ドンキホテ式スピリットの足らざる人々にさゝぐ―」
（『東北文学』73号、明治42.7）

東京帝国大学時代

1909年　ステイヴンソン著、木村久一訳「いたづら」（『新人』10巻11号 明治42.11）
1912年　「精神分析法の話」（『心理研究』心理学研究会、2巻2冊（8号）明治45.8）
「秘密観破法と抑圧観念探索法」（『心理研究』2巻3冊（9号）大正元.9）
「応問」連想診断法による鑑定、連想機転の法則について回答
（『心理研究』2巻5冊（11号）大正元.11）
1913年　「現代の予言者オストヴァルト」（『開拓者』8巻3号 大正2.3）
「天才教育論」（『心理研究』3巻3冊（15号）大正2.3）
「男と女の根本的相違」（『心理研究』3巻4冊（16号）大正2.4）
「応問　天才に関する参考書」（『心理研究』4巻5冊（17号）大正2.5）
「不快の忘却」（『心理研究』4巻2冊（20号）大正2.8）

麻布中学校教員時代

1913年　「ゲーテ論」（『開拓者』8巻9号 大正2.9）
1914年　「精神は何物なりや（一）」（『心理研究』5巻1冊（25号）大正3.1）
「精神は何物なりや（二）」（『心理研究』5巻2冊（26号）大正3.2）
「精神は何物なりや（三）」（『心理研究』5巻6冊（30号）大正3.6）
「精神は何物なりや（四）」（『心理研究』6巻1冊（31号）大正3.7）
「人の価値の認識」（『開拓者』9巻8号 大正3.8）
「精神は何物なりや（五）」（『心理研究』6巻3冊（33号）大正3.9）
「文芸　隠者」小説（『開拓者』9巻10号 大正3.10）
1915年　「主の歎き（小説）」（『六合雑誌』408号 大正4.1）
「古井戸物語」小説（『開拓者』10巻3号 大正4.3）
「宮参り（小説）」（『六合雑誌』410号 大正4.3）
「宮参り」（『六合雑誌』414号 大正4.7）
「型と思想」（『六合雑誌』415号 大正4.8）
「エデンの園」（『開拓者』10巻9号 大正4.9）
「学校の成績は能力の指数なりや（一）」（『心理研究』7巻6冊（42号）大正4.6）
「学校の成績は能力の指数なりや（二）」（『心理研究』8巻1冊（43号）大正4.7）
「学校の成績は能力の指数なりや（三）」（『心理研究』8巻2冊（44号）大正4.8）
「腺増殖と学校の成績―学校の成績は能力の指数なりや（四）」
（『心理研究』8巻4冊（46号）大正4.10）
「女子の運命」（『六合雑誌』416号 大正4.9）
「学者の職分―桑木博士等の貞操論を読んで」（『開拓者』10巻10号 大正4.10）
「学者の職分（承前）―桑木博士等の貞操論を読んで」
（『開拓者』10巻11号 大正4.11）
1916年　「民本政治の心理」（「新理想主義」大正5.2.25）
「古井戸物語」（『ローマ字』ローマ字ひろめ会、11巻2号 大正5.2）
「古井戸物語」（『ローマ字』11巻3号 大正5.3）
「ユダ」小説（『開拓者』11巻3号 大正5.3）
「デモクラスイの心理」（『六合雑誌』423号 大正5.4）
「婦人の王国―現代の女学生を如何に見る」回答（『六合雑誌』423号 大正5.4）
「民衆と政治」（『層雲』層雲社、6巻2号 大正5.5）

「デモクラシーの心理」（『心理研究』9巻6冊（54号）　大正5.6）
「文士過剰論」（『開拓者』11巻7号 大正5.7）
「英才教育の話（講話）」（『心理研究』10巻3冊（57号）大正5.9）
「英才教育の話（二）」（『心理研究』10巻4冊（58号）大正5.10）
「英才教育の話（三）」（『心理研究』10巻6冊（60号）大正5.12）
1917年　「英才教育の話（四）」（『心理研究』11巻1冊（51号）大正6.1）
「天才と教育」（『大学評論』1巻1号 大正6.1）
「立憲主義を徹底せよ」（『大学評論』1巻1号 大正6.1）
「憲政の発達を阻止する人心の惰性」（『大学評論』1巻2号 大正6.2）
「教員優遇の原理」（『大学評論』1巻3号 大正6.3）
「革命の心理的観察」（『大学評論』1巻4号 大正6.4）
木村久一著『早教育と天才』心理学研究会出版部 大正6.4
「民本主義の社会心理的基礎」（『大学評論』1巻5号 大正6.5）
「デモクラシーの心理」（『新公論』大正6.5）
「近代のデモクラ的傾向」（『大学評論』1巻6号 大正6.6）
「庶幾くば斯くて局面を展開せよ」（『大学評論』1巻7号 大正6.7）

早稲田大学教員時代

1917年　ミユンステルベルヒ著、木村久一訳「心理学者の観たる戦後の国際関係」
（『大学評論』1巻9号 大正6.9）
「今や改むべきに非ずや」（『大学評論』1巻10号 大正6.10）
「看板は平和主義、楽屋は軍備充実」（『中外』1巻1号 大正6.10）
「寺内々閣と学制改革」（『大学評論』1巻11号 大正6.11）
1918年　「世界歴史の約束と政治の進展」（『中外』2巻2号 大正7.2）
「早教育に対する非難に答ふ」（『心理研究』14巻1冊（79号）大正7.7）
「不可思議師の横行と学者」（『中外』2巻4号 大正7.4）
「独逸に於ける革命の可能性」（『大学評論』2巻5号 大正7.5）
「狂暴なる普魯西政府の思想政策」（『中外』2巻8号 大正7.7）
「秘密を欲する心と告白を欲する心」（『中央公論』大正7.7）
「出兵景気の中から起つた米騒動の諸印象」（『大学評論』2巻9号 大正7.9）
「あらゆる雑誌の煩悶」回答（『中外』2巻11号 大正7.10）
「我国民の道徳意識と官僚の思想政策」（『中外』2巻11号 大正7.10）
「閥族の次はプルトクラシー」（『大学評論』2巻11号 大正7.11）
「西山哲治著『教育問題と子供の権利』書評（『中外』2巻13号 大正7.12）
1919年　「天才遺伝説と天才変質説（中外講話）」（『中外』3巻1号 大正8.1）
「世界の大勢に孤立せる我国の諸現象」（『大学評論』3巻2号 大正8.2）
「新国民心理の創造」（『黎明会講演集』大鐙閣、第1輯 大正8.3）
「国内の差別撤廃に徹底せよ」（『中外』3巻3号 大正8.3）
「高等教育とデモクラシー」（『我等』1巻3号 大正8.3）
「人種的差別撤廃と階級的差別待遇撤廃」（『大学評論』3巻3号 大正8.3）
「異民族の同化」（『大学評論』3巻4号 大正8.4）
「黎明会と黎明運動」（『雄弁』大正8.4）
「不純なる人種的差別待遇撤廃の要求」（『中外』3巻4号 大正8.4）
「過激思想とその対応策」（『中央公論』大正8.5）
「世界改造の要求と日本」（『婦人公論』大正8.6）
「苦役と貧窮」（『中央公論』臨時増刊号 大正8.7）
「民衆の失望に終わつた講和」（『婦人公論』大正8.8）
「サーベルの同化政策」（『黎明会講演集』6輯 朝鮮問題号 大正8.8）
「社会主義の起る理由」（『婦人公論』大正8.9）
「改造の急を要するものは何か」（『婦人公論』大正8.10）
「民衆の世界改造」（『解放』第5号 大正8.10）
「社会問題としての義務教育」（『黎明会講演集』2巻2輯 大正8.10）
「旗幟いよ〳〵鮮明」（『大学評論』3巻11号 大正8.11）
「石田君の思ひ出」（『開拓者』14巻11号 大正8.12）

1920年　「啓明会講演を聴く」（『啓明』大正9.1）
「改造の根本としての教育」（『啓明』大正9.1）
「世界の形勢を見よ」（『大学評論』4巻1号 大正9.1）
「バ×トラ×ド・ラ×セ×の哲学」（『新公論』大正9.1）
「教育改造の新基礎」（『中央公論』大正9.1）
「ニコライ・レニン」（『新公論』大正9.2）
「思想言論の自由」（『大学評論』4巻1号 大正9.2）
「リーガリズムを危む」（『中央公論』大正9.3）
「生存競争と相互扶助」（『中央公論』大正9.4）
「思想言論の自由」（『黎明会講演集』2巻6輯 大正9.4）

検挙後

1921年　「現行裁判制度の改善に就て」回答（『中央法律新報』1年1号 大正10.2.1）
「模倣の心理」（『解放』3巻4号 大正10.4）
「監獄の労役時間」（『中央法律新報』1年21号 大正10.12.1）
木村久一著『早教育と天才』大鐙閣版（改訂増補）大正10
1922年　シンクレーア作、木村久一訳「愛国者」（『解放』4巻10号 大正11.10）

隆文館時代

1923年　アプトン・シンクレーア「百プロセント―愛国者の話」翻訳（『解放』5巻2号 大正12.2）
アプトン・シンクレーア「百プロセント―愛国者の話」翻訳（『解放』5巻3号 大正12.3）
1924年　木村久一著『早教育と天才』隆文館版（再版）大正13.6
1930年　木村久一編『仏典説話全集 索引篇』隆文館 昭和5

平凡社時代

1932年　「故有川治助君」（「東北学院時報」102号、昭和7.10.5）
1935年　「鉄あるところ祖国なし（対戦秘話）」（『維新』2巻2号 昭和10.2）
「百科事典漫談」（下中弥三郎編『百科事典の知識』平凡社、昭和10.3）
「学校の成績を悪くする原因」（『科学雑誌』科学の世界社、昭和10.6）
1937年　下中弥三郎編『時局解説百科要覧』平凡社 昭和12.11
（文化、労働、農政、時事等の解説を分担執筆）
1942年　「学校の成績と能力の關係」（『科学人』科学社、昭和17.5）
1946年　木村久一著『女子参政権』（社会教育文庫2）社会教育協会、昭和21.1
「天皇の神職的性格」（『小天地』平凡社、1号 昭和21.3）
「教育勅語の道徳教育」（『小天地』1巻2号 昭和21.4）
「チャーチルと学校教育」（『小天地』1巻3号 昭和21.5）
「君主の神聖について」（『小天地』1巻4号 昭和21.6）
「ローマ字採用論」（『小天地』1巻5号 昭和21.7）
「漢字制限は可能か」（『小天地』1巻6号 昭和21.8）
「ローマ字欄」（『小天地』1巻8号 昭和21.10）
「新仮名づかひ案を評す」（『小天地』1巻9号 昭和21.11）
1947年　「原子爆弾」（『時代』平凡社、2巻4号 昭和22.4）
「時の人　マーシャル元帥」（『時代』2巻5号 昭和22.5）
「アメリカの共産党」（『時代』2巻6号 昭和22.6）
「アイスラー事件」（『時代』2巻7号 昭和22.7）
「ハンガリーの共産クーデター」（『時代』2巻8号 昭和22.9）
「ヘボン博士」（『時代』2巻10号 昭和22.11）
1949年　「人民の為に人民の行う人民の政治」（『国民』576 社会教育協会 昭和24.6）
「旧友の話―ワツクスマンと鈴木博士―」（『国民』582 昭和24.12）
1959年　「往時の思い出」（『東北学院七十年史』昭和34.7）
1960年　「雲涯子について」（「東北学院時報」187号 昭和35.5.7）
「故人の思い出　木村迷羊さん（一）」（「東北学院時報」188号 昭和35.12.10）
1962年　「小松謙助君の思い出」（「東北学院時報」192号 昭和37.5.15）

東北学院理工系教育機関の系譜とその人脈

＝押川方義の創立理念＝
「東北をして日本のスコットランドたらしめん」が底流に

東北学院大学名誉教授
鶴本　勝夫

気候温暖で、歴史文化の薫り高い多賀城に昭和37（1962）年4月東北学院大学工学部が創設された。平成24（2012）年4月で50周年を迎える。

東北学院はこれまで以下に示す⑴～⑷の理工系教育機関を開設している。

⑴理科専修部（明治28年4月～明治30年3月）
院長：押川方義、理事局長：W・E・ホーイ、責任教授：楢橋盛次郎

⑵航空工業専門学校（昭和19年4月～昭和20年12月）
院長：出村悌三郎、理事長：杉山元治郎、校長：宮城音五郎

⑶工業専門学校（昭和20年12月～昭和22年3月）
院長：出村悌三郎、理事長：杉山元治郎、校長：宮城音五郎（昭和20年12月～昭和21年3月）、出村剛（昭和21年4月～昭和22年3月）

⑷工学部（昭和37年4月～現在）
【創設期】院長、学長：小田忠夫（初代工学部長兼務）、理事長：鈴木義男、第2代工学部長：永井健三（昭和39年4月～昭和59年3月）

はじめに

明治19（1886）年5月・仙台神学校として発足した東北学院は、キリスト教伝道者の養成に端を発したことからも明らかなように、前記の⑴では、理工系教育を運営するのに十分なノーハウを持ち合わせてはいなかった。また、⑵の専門学校開設は、風雲急を告げる時代の情勢に翻弄された典型的な事例である。ここに、前記の⑴～⑷について、その開設状況と人脈の一端を紹介し、「東北学院大学工学部五十年史」の序章につなげるものである。

押川方義

仙台神学校印

明治政府の近代教育制度に呼応

理科専修部開設、畑井新喜司を輩出

【理科専修部】

明治28（1895）年4月、東北学院は組織改革を断行した。この改革は明治政府の近代教育制度に呼応したものである。森有礼文相は、国家に有為な人材を育成するため、国体主義に重点をおく教育理念をかかげた。これを承けて井上毅文相は、実業教育制度を樹立するとともに、女子教育にも制度を拡充し、「富国のための教育として、科学教育に重点をおき、科学と技術と実業を三位一体とした産業教育の興隆」に意欲を燃やした。理科専修部は正にこの教育方針にそうよう、教授陣には新進気鋭な学者を招聘した。理科専修部は2年制、9月入学、6月卒業であった。理科専修部の学科は、以下の通りである。

理科専修部の講義棟

○第一年

修身・国語及び漢文、物理学、化学（無機）、英

語、数学（解析・幾何・微分）、倫理学、地質学及び鉱物学、画学、体操、独乙語（随意科）［以上11科目の履修］。

○第二年

修身・国語及び漢文、物理学、天文学、英語、数学（微分・積分・方程式）、倫理学、生物学、化学（有機）、画学、体操、独乙語（随意科）［以上12科目の履修］。

以上の科目構成の中で、産業教育の充実、欧米の特に西欧からの技術移入に伴い、技術先進国のドイツに照準をあわせ、ドイツ語の履修に多くの時間を割いていることが分かる。

○教授陣について

教授陣については「東北学院七十年史（157頁）」に詳しい。ここでは教授陣を代表して、フェライトの父といわれる加藤与五郎、卒業生を代表してミミズの研究で名声を博した畑井新喜司を取り上げる。

［加藤与五郎］

明治5（1872）年7月2日愛知県碧海郡依佐美村（現在の刈谷市）に父惣吉、母こうの長男として出生。父は村役場に勤めていた。家計は苦しく、勉学に対して父は厳しかった。高等小学校の時は、田植えや妹の子守りを手伝い母を助けたが、与五郎が8才のとき、母はチフスにかかり死亡。11才のとき継母を迎える。中学・高校には行かなかったが、明治28（1895）年6月、独学で同志社ハリス理科大学部二種化学科を卒業、明治29（1896）年3月、東北学院の教師となる。

東北学院では数学、物理学、化学を担当。数学は解析幾何、微分・積分学を担当するが、当初数学の指導に苦慮したという。夏休み中に、宮城県石巻と渡波の海岸を夜間散歩しているうち、その解法を見つけるなど工夫をこらしていた。

後に数学の教授法が話題となり旧制二高の教授に迎えられようとしたが、私学同志社出身の者は、国立校の教授には迎えられないとしたことに発奮、明治32（1899）年10月、東北学院を退職して同年11月、京都帝国大学の聴講生となった。明治33（1900）年9月、京都帝国大学理学部化学科に入学、明治36（1903）年7月卒業している。

その後、加藤与五郎は東京高等工業（現東京工業大学の前身）教授、武井武とともにフェライトコアの発明、電気化学協会を設立（初代会長）、アルミナの発明、資源化学研究所を設立（初代会長）、発明特許権三百余、工業会社創設（10社）など、数々の功績を上げた。

加藤与五郎

加藤与五郎は大学教育、研究についても独自の考えを持っていた。資源小国で、貿易立国の日本は頭で勝負するよりほかに道なしとして、「創造」を前面にかかげた。この「創造」を現実のものとするには、創造的直覚を訓練する必要がある。「直覚が出たときは、すぐそれを実行に移す勇気が必要です。実験して誤っていないかどうかを試すんです。役に立つと思ったら何も考えずに突進するんです。結果を考えない、ただ、勇猛邁進するだけです。」創造と実行の関わりをこう説明した。

東北学院教授時代の押川方義院長について「院長は非常に知恵自慢であった。東北学院を辞職してから思うようにいかなくなったのは知恵がありすぎたためだ」と述べている。

加藤与五郎は東北学院教授時代にキリスト教をみじかに感じ、同志社でキリスト教に一層深化し、クリスチャンになっている。しかし、晩年には日蓮宗にも関心を示し、眠れないときは「南無妙法蓮華経」と呪文をとなえていたという。

加藤与五郎は「心の清き者は幸いなり、その人は神を見ることを得べければなり」の聖句を好み、キリストの奇跡を信じて疑わなかったようである。幼少期の貧困にもめげず、独力で「創造の世界」を切り開き、遂には日本国を富ますことに全力を傾倒し、若い青少年を育成することにささげた人生は、稀有な存在であった。

東北学院での2年の教員生活は、数学の教授法をあみだし、「創造」の原点を醸成し、かつキリスト教に出会うなど、加藤自身の人生にも多くの恩恵をもたらしたことは、本人の手記や言動から明らかである。かって島崎藤村が短期日、東北学院に過ごして「若菜集」を世に出す契機となったように、東北学院は種々の転機を促す「場」となっている。

加藤与五郎の功績は大きく、昭和18（1943）年正三位勲二等、昭和32（1957）年文化功労賞、昭和37（1962）年同志社大学名誉文学博士の称号を受く。昭和39（1964）年勲二等旭日重光章を受章。昭和42（1967）年8月13日逝去。享年九十五才。

［畑井新喜司］

明治9（1876）年3月2日青森県東津軽郡小湊村144（現平内町）に、父多市・母たかの三男として

出生。地元の弘前中学校（現東奥義塾）をへて、明治25（1892）年9月、東北学院本科3年に編入。同27（1894）年6月卒業。理科専修部廃止となるが、明治31（1898）年3月、理科専修部卒業。卒業生は畑井新喜司と井上達三の2名（井上達三：陸軍中将、海軍大将井上成実は実弟）。

畑井新喜司

畑井新喜司は自力更生を旗印に勉学に邁進し、明治34（1901）年8月、シカゴ大学卒業後、ペンシルベニア大学ウイスター研究所教授、大正10（1921）年3月、東北帝国大学教授に就任、生物学教室の創設に尽力。同大学理学部付属機関として、青森県浅虫村に臨海実験所を設置、初代所長となる。その外、数々の学術会議の代表、パラオ熱帯生物研究所長を務める。

畑井新喜司は弘前中学に在学中、山形に住む姉りゅう夫妻の勧めで、姉の家に身を寄せたことがある。姉夫妻はともにクリスチャンで、宮城中会の代表である押川方義の指導により設立された六日町教会で受洗している。この頃、押川方義は山形英学校の校長を兼任、松村介石を教頭にすえてミッションスクールを開校している。これらの関係もあり、畑井は姉より東北学院への転学を勧められた。

明治25（1892）年秋から同30（1897）年6月に及ぶ五ケ年の東北学院の生活は、本人を理学の道へ導き、また、押川方義やD・B・シュネーダーらの説教によりキリスト教にも深く感銘し、学生生活は充実したものとなった。経済的な理由と、心身を鍛えるため、「労働会」に所属したことも、多くの励みになったようである。

理科専修部にあっては竹製顕微鏡を自作し、ミミズの生態をくまなく観察するなど、後に生物学者として名をなす伏線となった。細菌学者として有名な野口英世と畑井新喜司は、ともに明治九年の生まれであり、「畑井は第二の野口英世」と当時のジャーナリストは呼んでいた。米国のペンシルベニア大学で両者はしばしば顔を合せている。野口は五十五才、畑井は八十八才で逝去している。同じ東北人であり、それぞれに功績があるが、畑井は余り野口のことを口にしなかったという。敬虔なクリスチャンであった畑井は、野口の生活態度や人間性の点で違和感を覚え、ある程度距離を置いていたものと考えられる。

畑井新喜司が国際的に評価されているものに、「畑井メダル」がある。これは畑井がパラオ熱帯生物研究所で行った「太平洋の学術研究に対する永年の貢献」を記念して制定されたものである。日本が主体となって表彰する数少ない国際賞で、4年ごとに開催される太平洋学術会議（PSC）で授与される。昭和41（1966）年発足。

畑井メダル（東北大学史料館所蔵）

畑井新喜司の数々の功績に対して、昭和13（1938）年7月、東北帝国大学名誉教授に推挙された。昭和38（1963）年4月19日逝去。享年八十八才。

楢橋盛次郎

理科専修部の廃止に関して責任教授の楢橋盛次郎は「此の如き悲運に至りし所以の者は、これに当る教員がその責を負うべきは素より当然のことなり、然れども理科教育の設備、当得ざりしもの多きに居らん。而して今日迄私立学校に於ける理科教育が、その発達隆盛を見ることを得ざりしは職として是之に依る。1.機械 2.教員 3.建築。比の三つの者備わずんば、即ちその目的を成就する能わず。理科教育の成功を期する抑亦難哉。」と述懐し、苦渋の決断であったことを記録にとどめている。

東北軍管区より廃校命令

航空工業専門学校開設で回避
萱場資郎、宮城音五郎が尽力

【航空工業専門学校】

昭和16（1941）年12月1日、日本が奇策を労して真珠湾攻撃を敢行、米国に対して宣戦布告、太平洋戦争の幕開けとなった。東条英機のもと、軍国日本の戦果は、時の経過とともに暗雲が漂いはじめ、戦略、戦術ともに米英の前に立ち行かなくなったのである。軍部は神がかりともいえる「皇国・大和魂」を持ち出し、結果的には多くの犠牲を強いるものとなった。

教育現場にもいかんなくその影響が現われ、奉安殿への拝礼や軍事教練を指示し、学外へは勤労動員を強要するなど、学問をすることは二の次となった。神宮外苑における出征学徒のための「雨の壮行会」は、今にして思えば「悲壮」のなにものでもなかった。

東北学院も例外ではなかった。昭和18（1943）年10月18日、東北軍管区司令官東海林俊成少将から「東北学院は時節柄、不要不急の教育機関である。

航空工業専門学校　講義棟

今年度限りで廃校とし、校舎は陸軍において接収する。」との命令が出された。出村悌三郎院長は重い十字架を背負わされたのである。打開の糸口を見出す相談相手として、当時、東北学院同窓会東京支部長をしていた萱場資郎をおいて外になく、出村は急遽上京したのであった。

萱場資郎は国内有数の軍需産業、カヤバ工業㈱「現㈱KYB」の創業者であり、陸海軍の首脳陣からことのほか信頼が厚かった。

萱場資郎は第二代院長D・B・シュネーダーの人間性とその教えを身にしみて享受した一人であり、母校東北学院、郷土仙台、そして宮城県を愛する情に厚い人でもあった。東北学院存続のため、萱場は出村とともに東北軍管区、宮城県、文部省、東北大学に対して精力的に請願して廻った。度重なる請願の結果、廃校命令は撤回され、時勢に従い昭和19（1944）年4月、「東北学院航空工業専門学校」が開設された。（「東北学院資料室」、Vol.7.2007.12.31発行、「東北学院航空工業専門学校の誕生と萱場資郎」参照。）

航空工業専門学校当時の航空部学生

出村悌三郎理事長が、昭和19（1944）年2月29日付けで文部大臣子爵岡部長景宛に出した「航空工業専門学校設置認可申請書」の中で、設置理由を「当財団ハ、先ニ発表セラレタ政府ノ教育ニ関スル非常措置ノ精神ニ則リ、高等商学部ノ諸施設ヲ挙ゲテ決戦兵器タル航空機ノ生産関係並ニ整備関係ノ技術者養成機関ニ転換シ、一ハ以テ現時我ガ国、最大急用ニ応ヘ、一ハ以テ皇国将来ノ大使命達成ニ貢献セントス」として、軍の統制に応えようとしていた。

以上の経緯で明らかなように、東北学院は第二次世界大戦時には、数奇な運命を余儀なくされた。この困難な時期を乗り越えた当時の出村悌三郎院長・理事長と、東北学院の命脈をつないだ萱場資郎並びに航空工業専門学校の校長に就任した宮城音五郎の略歴を以下に記す。

［出村悌三郎］

第二代院長D・B・シュネーダーの後任として、第三代院長に就任した哲学博士である。出村は初代院長押川方義とD・B・シュネーダー両者の思想を融合させ、ふりかかる艱難に耐え見事に東北学院を蘇生させた恩人でもある。

出村悌三郎は明治6（1873）年2月12日、新潟県北蒲原郡五十公（いじみの）村で父総太郎、母ときの三男として出生。出村家は代々新発田藩主溝口氏の祐筆（書記）をつとめた。東北学院が創立された明治19（1886）年、十三才のとき新潟英学校（後に北越学館と改称）入学、明治21（1888）年1月、東北学院に転学、本科生として明治26（1893）年6月卒業、明治29（1896）年6月、英語神学科卒業。東北学院への転学理由はパーム、押川方義らの新潟に於けるキリスト教伝道にあった。また、東北学院にあっては、押川方義、W・E・ホーイ、D・B・シュネーダーによる薫陶は大なるものがあり、卒業後、東北学院で教鞭をとることになった。海外留学の経験も豊富で、明治43（1910）年ハーバード大学で哲学修士の学位を取得している。

出村悌三郎

昭和11（1936）年5月、出村悌三郎六十三才のとき、第三代東北学院長に就任、昭和20（1945）年3月退任。在任中、最も激務にさらされたのは、第二次世界大戦に遭遇したときであった。時の軍部による教育統制は、キリスト教に基盤をおく東北学院にとっては、その前途が危ぶまれる数々の指令が含まれていた。しかし、出村は、この非常時を乗り切るため、押川方義の「日本救国思想」とシュネーダーの「福音主義」を融合させた「敬神愛人」を、建学精神に据えた。これは日本精神運動や大和民族の隆盛に背馳するものではなく、むしろ実践の時であるとして、自ら前向きにとらえようと努力したのであった。

自分の専門と異なる工学系の航空工業専門学校の開設に対して、現実的には「背に腹は代えられぬ」との事情があり、「皇国日本」の嵐が通りぬけるのを辛抱強く耐え抜いた名院長であった。昭和20（1945）年3月、院長を辞任。同年7月10日未明の仙台空襲にあい罹災、三千冊の蔵書を消失した。昭和24（1949）年12月26日逝去。享年七十七才。故郷新潟と仙台北山キリスト教共同墓地に分骨、埋葬された。

［萱場資郎］

明治31（1898）年4月1日父富次郎、母よさの次男として、仙台市荒井畑中（現仙台市若林区荒井）で出生。当初「萱場四郎」と称したが、昭和18（1943）年1月1日、四十五才のとき「萱場資郎」と改名した。

幼少の頃は身体が弱く、尋常高等小学校にあっては休学することが多かったという。父母はこれを案じ、大正2（1913）年4月、「ゆとりある教育」で定評のあった東北学院中学部に入学させることにした。当時としては珍しい自転車通学で、道すがら創意工夫の芽がはぐくまれていった。どこからともなく出てくる犬を追い払うために、「犬たたき棒」を後輪泥よけフレームにセットしたり、自転車を改良して「水上挺」に作りかえるなどしていた。

中学部に在学中、D・B・シュネーダーのキリスト教並びに先生の人間性に感銘を受け、深く畏敬の念をいだくようになった。この思いは終生変わることがなかった。しかし、中学部二年のときに勃発した第一次世界大戦に大いに疑問を感じたのだった。

「キリスト教を信奉する国々が、競って人々を殺戮しているとは一体？…」そして考えるに「宗教や道徳は、戦争という現実に対して余りにも無力ではないか。どうしたら世界平和は保たれるのか？。」自分の部屋に世界地図を広げ、日本の立ち位置をみつめた。

「戦争に巻き込まれることなく、日本に平和をもたらすには“他国より侵略されない絶対的な力”を保持すること以外に方法はない。そのためには、優れた兵器（＝理想兵器）を開発して戦争を抑止することだ。」という結論に達した。

元来ものづくりに関心のつよかった萱場資郎は、大正5（1916）年3月、上京して明治大学、早稲田大学へと進むが、東大造兵科のノートを借り受け、ひたすら兵器研究に没頭、早稲田大学を中退して「萱場発明研究所」を立ち上げた。後の萱場製作所の前身である。萱場資郎は、空油圧装置をベースに数々の軍需製品を発明、全国に9つの軍需工場をもつ社主となった。陸海軍の首脳陣からは相当の信頼を得ていた。特に、創業時には、同郷の士仙台市出身の海軍艦政本部長山梨勝之進（後に海軍大将、学習院長）の支援を受けたことに、深く謝意を述べている。この恩義は後に郷土仙台、並びに母校東北学院に対して、報恩の考えを強める結果となった。

萱場資郎

萱場資郎はジェット機の到来を予測、無尾翼ジェット機（KF）の試作に関心を寄せた。ジェット機は機体後方より高温、高圧のガスを噴射するため、無尾翼にすることがのぞましいと考えた。これらの研究結果、ヘリコプターの前身と位置づけられる萱場式オートジャイロの開発にとりかかり、昭和17（1942）年12月、萱場製作所仙台製造所で生産が始まった。仙台製造所の従業員は2363名であった。

萱場式オートジャイロ

東北学院同窓会東京支部長をしていた萱場資郎は、戦時体制に入る前から、東北学院に対して、自立自給の方策を建言していた。「時勢からして文科系から工科系の専門学校に移行すべき」との内容である。萱場の読みは的中し、「東北学院の廃校」が必須の情勢となった。結果として、萱場の提案をもとに、「東北学院航空工業専門学校」の開設に漕ぎつけた。萱場製作所仙台製造所を航空工専生の実習工場に提供し、二百名の学生を引き受けている。また、航空工専の年間維持費十万円は、萱場資郎個人の寄付によってまかなわれた。

萱場資郎は軍、政界並びに教育関係者などの人脈を通じて、東北学院の命脈をつないだ恩人である。これらの経緯については、東北学院創立85周年記念日（昭和46年5月15日）に開催されたＴＧ15日会の席上で、萱場本人から明かされた。正に「地の塩」としての働きであった。戦時中、萱場は数々の役職に就任、その重責を全うした。

萱場資郎は昭和13（1938）年7月18日、恩師Ｄ・Ｂ・シュネーダー夫妻が再来日したときの歓迎会に関する一切の総責任者として先生を厚遇したことや、その他の事跡を顧みるとき、恩恵を受けた人々に対して、終生感謝を忘れなかった人でもある。【かって、航空工業専門学校の前庭と礼拝堂脇に設

置された２つの飛行機、九八式軽爆撃機（川崎航空機製）とベニア板張りの特別攻撃機は萱場資郎の好意により、寄贈されたものである。】昭和49（1974）年5月12日逝去。享年七十七才。東京都大田区の日蓮宗池上本門寺に眠る。

［宮城音五郎］

東北大学長熊谷岱蔵はD・B・シュネーダーと親交があり、東北学院の廃校命令を聞くに及び、他人ごととは思えなかった。出村悌三郎からの航空工業専門学校開設に関する協力は、惜しむべくもなかった。熊谷学長は当時工学部長であった宮城音五郎に対して、極力支援するように要請したのであった。宮城音五郎は、機械工学一般や機構学、特に流体力学、流体機械の権威であり、飛行機や船舶の設計に関して多くの論文がある。従って、航空工専の校長就任は自然の成り行きであった。宮城は、自分を師と仰ぐ機械工学科の主任教授成瀬政男を片腕として、航空工専の学科編成並びに人事を進めていった。

【以上の経緯もあり、成瀬政男は、後に創設される東北学院大学工学部の設置準備委員会の座長に推挙され、初代工学部長に就任要請されるようになる。】

宮城音五郎

宮城音五郎は明治16（1883）年8月、埼玉県大里郡久下村（現熊谷市）で出生。明治41（1908）年3月、東京帝国大学工学部機械工学科卒業。明治43（1910）年4月、仙台高等工業専門学校（SKK）教授。大正8（1919）年東北帝国大学教授となる。昭和9（1934）年4月、東北大学工学部長に就任。昭和20（1945）年に定年退官。昭和19（1944）年4月、東北学院航空工業専門学校長就任。これは東北大学工学部長との兼務状態にあった。昭和21（1946）年3月、校長辞任。宮城音五郎は折にふれて講演し、科学・技術の啓蒙につとめている。「科学と技術は、微分と積分の関係にある。」と持論を展開、「技術の本質」、「科学から工業へ」、「工業随筆」などの著書がある。著書では、当時の国防の視点から飛行機やロケットの話が頻繁にでてくる。機構学の話では、歯車の騒音に焦点をあて、歯車解析に接線座標の使用を勧めている。前掲の成瀬政男はこれに従い、「歯車の成瀬」として名声を博し、世界に冠たる位置を占めたことは注目に価する。成瀬が宮城音五郎を「我が師」と仰いだ所似はここにあった。

宮城音五郎は東北大学在任中、旧制二高漕艇部のボート（固定席艇）設計者としても知られていた。宮城は後に東北大学名誉教授に推挙され、仙台第一高等学校長、宮城県教育長、宮城県知事（昭和27年10月5日～昭和31年10月5日、4年間在職）を歴任、昭和39（1964）年4月、東北工業大学の初代学長に迎えられた。昭和42（1967）年9月14日逝去。享年八十五才。仙台市若林区龍泉寺に眠る。

【工業専門学校】

昭和20（1945）年8月15日、日本がポツダム宣言を受諾したことから、日本は戦争を放棄し、陸海軍すべてを解体することになった。軍事一色の教育も、これにより解放され、東北学院航空工業専門学校も廃止の方向で検討することになった。東北学院航空工専は、航空機科（百名）、発動機科（五十名）の2学科で発足したが、工業専門学校に改組後は、機械科（八十名）、電気科（四十名）、工業経営科（八十名）の3学科、計二百名で発足すると文部省に申請したが，認められなかった。特に電気科の設置に難色を示し、結局、生産工業科（機械分科七十名、建築分科七十名）、工業経営科（六十名）の2学科、計二百名を許可すると通告してきた。昭和21年4月より、工業高等専門学校の校長には出村剛が就任した。

東北学院航空工専（3年制）が2年経過で廃止となったため、航空工専生らは進路に迷いを生じた。東北学院は、学生らの種々の希望を入れ、次に示す3つの進路を用意して、学制の改廃に伴う混乱を乗り切ろうとした。

⑴昭和20年12月より、東北学院工業専門学校へ進学、昭和22年3月卒業する。
⑵昭和21年4月より、東北学院専門学校（文・経）の2年次に編入学し、昭和23年3月に卒業する。
⑶関東方面の私学に転校斡旋。

以下に、工業専門学校長出村剛と、航空工業専門学校の第1期生として入学したが、種々の事情で上記⑵の専門部経済科に編入学を余儀なくされた元利府町長高橋信隆の2名を取り上げる。

［出村　剛］

明治18（1885）年12月1日新潟県北蒲原郡五十公野村で、父保之助、母はつの長男として出生。五才のとき、父を、二十一才のとき母を失う。［出村総太郎、ときの長男が保之助、三男が悌三郎。出村剛、もとの長男が、本学元副学長の出村彰。］出村剛は、

出村　剛

新潟中学、日本中学をへて、叔父の出村悌三郎を慕って東北学院普通科に転学、明治40（1907）年3月、東北学院専門部文科卒業、同年4月、東北学院普通科英語教師となる。

大正元（1912）年9月、ニューヨーク州オーボン神学校入学、卒業とともにバチェラー・オブ・デビニティの学位を取得。大正6（1917）年ペンシルベニア州ランカスター神学校へ入学、大正7（1918）年9月、ニューヨーク州ユニオン神学校研究科入学、一年間研究。大正8（1919）年、帰朝後、東北学院神学部教授、昭和3（1928）年8月、ニューヨーク州オーボン神学校研究科入学一年間研究。昭和4（1929）年12月帰朝。母校で教鞭をとると共に東北帝国大学法文学部講師を兼任。

昭和16（1941）年高等学校長、昭和20（1945）年4月、中学校長、昭和21（1946）年4月、専門学校長、同年11月、東北学院第四代院長に就任。昭和24（1949）年9月29日逝去。享年六十五才。仙台市北山キリスト教共同墓地に眠る。

出村剛は、D・B・シュネーダー、出村悌三郎を範とした。米国との戦争のさなか、日本と米国のかけ橋となり、米国のミッションボードより、多額の支援金を受けている。これでもって高等学部及び専門部の自然科学教室の拡充につとめた。また、新制大学の発足にも尽力したと云われる。元来、温厚な人柄であったが、不正には組せず、温情入学には断固反対したという。本人の履歴からも明らかなように、出村家には神学と英学に関わり深い伝統が脈々と流れている。

［高橋信隆］

宮城県利府町利府字大町七十四で、昭和2（1927）年1月26日出生。昭和19（1944）年3月、旧制二中卒業。同年4月、東北学院航空工業専門学校に入学するも、2年後に廃校となり、昭和21（1946）年4月東北学院専門学校経済科2年次に編入学、昭和23年3月同校卒業。利府町農業共同組合理事、組合長など数々の要職をへて、昭和60（1985）年3月、利府町長に就任。平成10（1998）年3月まで12年間在職。

高橋信隆

高橋信隆は、航空工専在学中、萱場製作所仙台製造所に動員され、タレット旋盤など工作機械の手入れや整備に従事した。また、萱場式オートジャイロの部品製作にも関わった。ほかに、ヤスリがけや、焼けた短剣などを菜種油に浸して焼き直しなども行ったという。高橋らは中島飛行機太田製作所にも動員され、B29墜落機の残骸整理、遺体収容などに従事させられたという。この時の体験を高橋は次のように述べている。

「これは昭和20（1945）年2月10日、B29が中島飛行機太田製作所に墜落し、百六十二名死亡した事故であった。B29はグアムやサイパンを四百km/hで10時間かかって東京に来ていた。帰りは20時間かけてもとの基地に戻っていた。米軍は日本の重要な日、例えば、2月11日の紀元節や3月10日の陸軍記念日などに空爆している。今回の墜落事故も、B29の先頭を飛んでいた飛行機に、日本の戦闘機が体当たりして衝突したもので、その破片が別のB29にも当たり、結果2機が墜落した。墜落したB29をみて、日本のトタンやベニア板を使用した“軽飛行機”との違いをまざまざと感じとった」という。「日本では離陸した“軽飛行機”は、航続距離を伸ばすため、車輪も落とした。その点、米機にはリベットが使用されており、細部にわたり配線が施されていた。また、機内はホテル並で、女性の裸体なども描かれており、搭乗員への配慮も見られた。」という。現在八十四才。利府のご自宅で、元気に過ごされている。

工学部創設にかけた小田忠夫学長の夢

～成瀬政男教授（座長）に諮問～

「クリスチャンエンジニアの養成」

【東北学院大学工学部】

工学部は昭和37（1962）年4月創設され、現在に及んでいる。多賀城キャンパスには戦時中、多賀城海軍工廠の男子工員宿舎および旧制中学動員学生のための寄宿舎が立っており、戦後は一時米軍に接収され、米兵家族の住宅やアメリカンスクールなどに使用されていた。米軍の撤収後は大蔵省東北財務局の管理下にあった。

かねてより東北学院では、次の⑴～⑶の構想をもっていた。

⑴教養学部の開設。
⑵第二高等学校の開設。
⑶商工業高等学校の開設。

⑴については泉キャンパスに教養学部を開設、⑵は教養学部に隣接して東北学院榴ケ岡高等学校を開設する方向で検討していた。⑶については、多賀城

キャンパスが払い下げられた場合を想定し、当時宮城県立工業高校の校長を退職して間もない福田鉄太郎を、東北学院商工業高校の校長に据えるという腹案を持っていた。しかし、小田忠夫学長は、別項に記す通りの夢があり、理工系学部の創設に大きく舵を切ることになった。

福田鉄太郎は、小田学長の意向を受け、仙台高等工業専門学校（SKK）時代の恩師でもある東北大学工学部精密工学科教授成瀬政男に相談したところ、「工学部設置準備委員会」を立ち上げ、その座長となることを承諾した。工学部創設時にむけ、「初代工学部長を要請される」ことは重々承知の上であったという。

【小田忠夫学長の工学部創設にかけた夢】

小田学長は、東北学院大学を文・経の単科大学としてではなく、総合大学として貢献することの夢を捨てきれないでいた。折にふれ医学部創設の要請が、当時の山本壮一郎宮城県知事から出されていた。これは東北学院OBに、医学部出身者が結構いることによるものであった。しかし、運営の観点から、膨大な資金を要すると見込まれ、医学部創設は見送られていた。その点、工学部創設はそれ程負担にならず、時代の要請でもあると感じとっていたのである。小田学長は総合大学への格上げを誇示するのではなく、「キリスト教の教えに理解のある理工系学生を輩出すること」も、広い意味でのキリスト教伝道であると考え、クリスチャンエンジニアの働きに期待したのであった。工学部が創設される昭和37（1962）年頃の多賀城は、仙塩工業地帯の中心にあり、地元に貢献するエンジニアの輩出は、大いに望まれるところであった。

小田忠夫

さらに、小田学長の脳裏には東北学院の創立者押川方義が「東北をして日本のスコットランドたらしめん」と提唱した創立理念があった。この理念を一歩でも実現するために、また現実問題として、東北・北海道地域、あるいは東南アジアなど未開の地域で働くクリスチャンエンジニアの姿を夢に描いていたのであった。

当時、本学の理事会では「理工系の教員には唯物主義者が多く、キリスト教教育機関の維持に困難をきたすのではないか」と懸念が表明され、工学部の創設に異をとなえる理事もいたと云われる。しかし、東京帝国大学教授大内兵衛の門下生である小田学長には通じなかったようである。

工学部の創設に関して文部省は、これまでの東北学院大学の運営実績と、「工学部設置準備委員会」の委員構成が、東北大学の教官で占められていたことから、暗黙に了解を与え、許可する方向で動いていた。

すでに述べたように、「一人でも多くのクリスチャンエンジニアを育てたい」という小田忠夫学長の強い執念がみのり、これが工学部創設の原動力となったことは確かである。

以下に工学部が創設されるまでの、大蔵省財務局及び文部省との折衝過程を示す。

⑴昭和33（1958）年2月大蔵省東北財務局と接触開始
⑵昭和36（1961）年4月1日、「工学部設置準備委員会」発足
⑶昭和36（1961）年9月25 日、多賀城キャンパスの土地払い下げ申請、三万三千坪（百八万九千㎡）
⑷昭和36（1961）年11月20日、新校舎（現3号館）建築開始。昭和37（1962）年10月31日完成
⑸昭和37（1962）年2月17日、文部省より工学部設置許可される
⑹昭和37（1962）年2月27日、大蔵省より多賀城キャンパスの土地払い下げ許可される
⑺昭和37（1962）年4月19日、工学部第一回入学式

「工学部設置準備委員会」は、次の8名によって構成された。工学部の学科編成、学科課程、教員人事などが話し合われ、小田忠夫学長に答申した。

諮問委員会：成瀬政男（座長）、棚沢秦、小柴文三郎、和田正信、遠藤義夫、野邑雄吉、福本喜繁、仁科存。結果として、機械工学科、電気工学科、応用物理学科の3学科を設置。機械工学科長に小柴文三郎、電気工学科長に遠藤義夫、応用物理学科長に野邑雄吉を充てた。初代工学部長と目された成瀬政男は、初代職業訓練大学校長に就任要請されたため空席となり、当面小田忠夫学長が兼務することになった。（昭和37年4月～昭和39年3月の2年間）。これに伴い、小柴文三郎が工学部長補佐に就任した。昭和39（1964）年4月、第二代工学部長に永井健三が就任（20年間在職）、本格的な工学部運営が始まった。

以下に「工学部設置準備委員会」諮問委員の略歴を紹介する。

［成瀬政男］（座長）

成瀬政男

明治31（1898）年2月3日千葉県北条町八幡（現館山市）で出生。千葉県安房中学、仙台高等工業専門学校（SKK）、東北帝国大学機械工学科卒、昭和6（1931）年東北学帝国大学教授、三十三才のとき「歯車の歯型に関する研究」で工学博士の学位を取得。昭和10（1935）年11月～昭和13（1938）年8月機構学、機械力学研究のため、欧米に留学、昭和17（1942）年6月、宮城県北上川揚水ポンプ駆動用歯車の故障修理の様子が、小学校教科書に掲載される。昭和28（1953）年5月、学士院賞受賞。朝日文化賞、「製鉄用大型傘歯車の修理並びにその国産化」で、第3回河北文化賞、出版文化賞、自動車技術会表彰、昭和36（1961）年4月、職業訓練大学校長に就任。東洋大学工学部教授、東北大学名誉教授。昭和43（1968）年勲二等瑞宝章受章。昭和54（1979）年7月12日逝去。享年八十三才。

［棚沢　秦］

明治39（1906）年10月23日仙台市木町通2-3-55で出生。東京府立第五中学、第一高等学校理科甲類、東京帝国大学理科甲類、東京帝国大学機械工学科卒。昭和４（1929）年4月、東北帝国大学工学部講師、昭和16（1941）年7月、東北帝国大学教授（航空学科）、昭和21（1946）年1月、東北大学工学部教授（工業力学、精密工学科）。専門は熱力学、工業熱力学。「炭化コルクの研究」、「液化微粒化の実験」、自動車の燃焼問題に取組んだ。「ガスタービン」、「内燃機関」の著書がある。

［小柴文三郎］

明治29（1896）年12月30日東京都新宿区早稲田鶴巻町223で出生。東京帝国大学工学部機械工学科卒。仙台高等工業専門学校（ＳＫＫ）教授、東北大学工学部精密工学科講師、山形大学工学部教授をへて、昭和37（1962）年4月、東北学院大学工学部機械工学科教授、初代機械工学科長。専門は材料力学。ＳＫＫ時代には大型2輪車でさっそうと通勤、俳優並みの風貌と併せて、話題をさらった。　初代工学部長小田忠夫を補佐し、2年間部長代理を務めた。昭和51（1976）年3月14日逝去。享年七十才。

［和田政信］

工学部設置準備委員会の委員では、唯一クリスチャンであり、棚沢秦とともに座長を補佐し、有益な助言を行った。

大正5（1916）年8月2日東京都渋谷区青山で出生。大正15（1926）年10月、父親の転勤で仙台へ。旧制二中、二高理科甲類、東北帝国大学工学部電気工学科卒。昭和14（1939）年3月、東北帝国大学助手（工学部電気工学科）、昭和33（1958）年4月、東北大学教授（電気通信研究所）、在任中、宇宙開発委員会、電気・電子通信学会、日本テレビジョン学会、液晶国際学会などで、多くの要職につく。研究内容は真空管、電気・光変換、画像工学。昭和33（1958）年1月10日、従三位勲二等瑞宝章受章。IEEEより、フェローに推挙。

和田は青少年の教育について、「環境が人間を育てていることを忘れてはいけない。単に精神教育を空念仏に唱えていれば済むことではない。」と、また「卒業してから何年かたって、母校の校門の前に立ったとき、文字通り母なる学舎、母校となりうる資格のある学校がいくつあるか」と懸念していた。「努力は道を拓く」が信条。昭和55（1980）年1月10日逝去。享年六十五才。1月27日東北学院大学土樋キャンパス礼拝堂で葬儀が行われた。

［遠藤義夫］

明治37（1904）年9月9日仙台市原町南目字町35で出生。旧制仙台一中、二高、東北帝国大学工学部電気工学科卒。昭和25（1950）年2月、工学博士の学位を取得（東北大学）。日立製作所、東北大学電気通信研究所副手、㈱日電製作所工場長、産業電気㈱代表取締役を歴任。昭和37（1962）年4月、東北学院大学工学部電気工学科教授、初代電気工学科長。専門は電力工学、自動制御。昭和63（1988）年3月勲四等旭日小綬章受章。

「野邑雄吉」

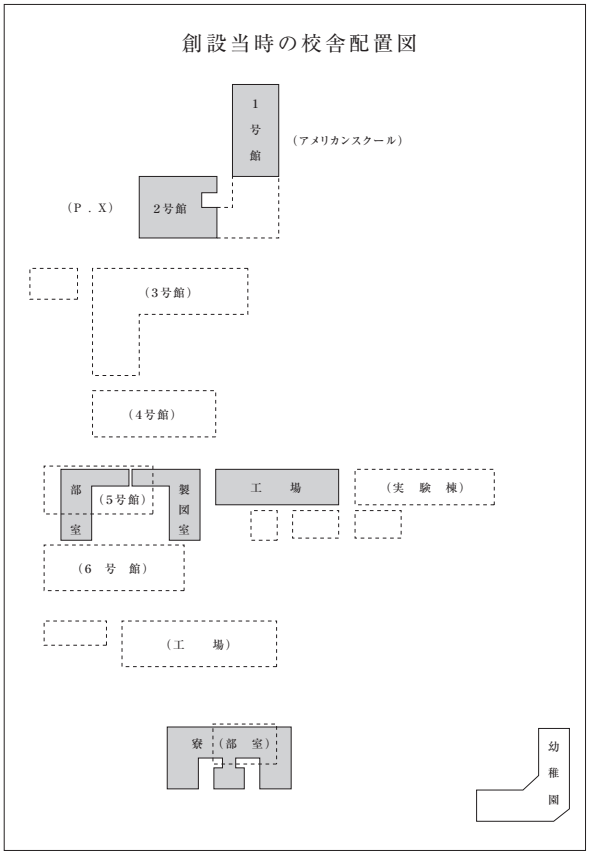
明治31（1898）年9月28日山口県柳井市大字古開作第三百八十で出生。東北帝国大学理学部物理学科卒。昭和14（1939）年12月、理学博士の学位を取得（東北大学）。旧制二高教授をへて昭和27（1952）年7月、東北大学教授。昭和37（1962）年4月、東北学院大学工学部応用物理学科教授、初代応用物理学科長。数理、物理学に関する論文多数。著書「応用数学（内田老鶴圃）」は有名。白系ロシア人の血をひく風貌で、容姿端麗、学者然としていた。東北大学に先駆けて応用物理学科を創設できたことに、誇りを感じていた。

［福本喜繁］

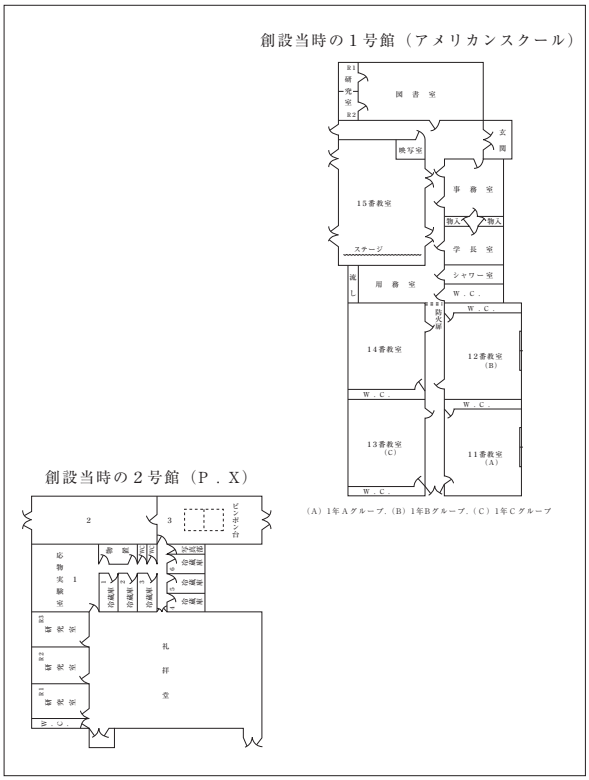
明治35（1902）年3月1日香川県高松市仏生山町甲2625で出生。旧制第六高等学校、東京帝国大学理学部物理学科卒。東北帝国大学理学部助手、仙台高等工業専門学校（SKK）教授をへて、昭和24（1949）年7月31日、東北大学教授。昭和40（1965）年4月1日、東北学院大学工学部教授。昭和50（1975）年3月31日、同大学退職、論文「海水の二、三の物理的性質」、「火山ガスの吸収スペクトル」、著書「科学断想」、「波をたずねて」「火・熱・温度」、「一般物理学」等の物理関係の教科書、参考書も多い。昭和51（1976）年2月19日逝去。享年七十五才。

［仁科　存］

岡山県出身。明治37（1904）年生まれ。昭和3（1928）年3月、東北帝国大学理学部物理学科卒。逓信省電気試験所研究員、昭和12年9月～昭和16年7月、東北大学金属材料研究所所員、製鋼部、助教授。昭和18（1943）年4月12日、北海道帝国大学で学位を取得。理学博士論文「鉄―ニッケル合金の導磁率に及ぼす特殊熱処理について（英文）」、昭和26年～昭和27年、金属工業研究所長、電気磁気材料研究所参与。特許取得多数。代表的論文「磁気合金」、「高初導磁率合金」、「磁気録音用合金線」。著書「磁性材料」。朝日文化賞受賞。



創設当時の校舎配置図



創設当時の1号館（アメリカンスクール）・2号館（PX）

工学部設置準備委員会は以上の8名によって構成され、諮問された。しかし、昭和37（1962）年4月の開学時には学科課程や教授陣が十分に整わず、見切り発車となった。学生らは学科の別なく、「工学部生」として一括入学許可され、2年目にして学生の希望と1学年次の成績を考慮して、機械工学科、電気工学科、応用物理学科の3学科に編成がえした。当時は、2年次までが教養課程と位置づけられており、功を奏した格好である。

校舎は米軍PX、アメリカンスクール（現工学基礎教育センター付近）を改修して教室とし、授業を開始した。当時、工学部機械工学科設置認可の付帯条件とされた機械実習工場は、米軍の通信施設（現2号館北側実験棟付近）を改修してこれに充てた。

開学時、多賀城キャンパスに在籍した理工系専任教授は、小柴文三郎（M）、移川貞次（M）、佐藤恭三（M）、遠藤義夫（E）、佐々木廸之（E）、野邑雄吉（P）、枝本勇雄（P）、岡本和人（P）の8名。

昭和37（1962）年4月19日、仙台市土樋キャンパス礼拝堂で第一回工学部入学式が行われた。同年10月31日、多賀城キャンパス3号館落成式並びに特別講演会が行われた。講演者は、職業訓練大学校長成瀬政男、演題は「科学・技術・技能」。

以下に初代工学部長小田忠夫（兼務、2年間在職）第二代工学部長永井健三（20年間在職）の略歴を示す。

［小田忠夫］

明治34（1901）年1月4日宮城県桃生郡雄勝町上雄勝で、父忠平、母志保の次男として出生。小田家は祖父の代まで、近郊の神官を務めていた。父は雄勝町で廻船問屋を営んでいた。

東北学院中高校長・理事長を努めた月浦利雄も同郷であり、ともに東北学院を支えた。小田は地元の高等小学校を出ると、東北学院の中学部に進学、後に旧制二高、東京帝国大学経済学部を卒業。旧制二高の2年生の頃、牧師梶原八郎の勧めもあり受洗。内村鑑三や矢内原忠雄らに強く影響を受けた。学問的にはマルクス経済学の大内兵衛、有沢広巳らに師事、東大卒業後は㈶市政調査会研究員を命ぜられ、昭和7（1932）年5月から2年間ドイツへ留学、「ナチスの経済政策」を執筆。

大正11（1922）年7月、京城帝国大学助教授（任高等官六等）、同年8月、正七位に。大正12（1923）年7月京城帝国大学教授に昇任（任高等官五等）。「日本統治下における朝鮮の財政制度」は、東北大学での博士論文となっている。日本が太平洋戦争で敗戦した昭和20（1945）年8月、京城帝国大学を退官、日本に引き上げる。昭和21（1946）年4月、東北学院専門学校教授として赴任。昭和57（1982）年3月13日に逝去するまで、36年間東北学院とともに歩んだ「東北学院・中興の祖」とも云われる。

小田は東北学院在任中、東北学院大学を単科大学から、工学部や法学部、教養学部を併設して総合大学に格上げした功績は大きい。本人は寡黙で多くを語らない東北人特有の人材と評されることが多いが、ことキリスト教教育に関する私見、随想、数々の説教からは確たる信念が伝わってくる。小田は「東北をして日本のスコットランドたらしめん」という、押川方義の創立理念とD・B・シュネーダーの「我、福音を恥とせず」という教育理念を併せて建学精神とし、その信念のもと、実現に生涯を賭けたのだった。

東北学院の理工系教育に関して小田忠夫学長は、創立75周年の記念礼拝（昭和36年5月15日）で次のように抱負を述べている。

「キリスト教主義学園における理科系職員の養成と補給を図り、進んでは低開発地域としての東北開発のためのキリスト教的信念の豊かな技術者を養成し、ひいては日本現下の技術者養成にも一段の協力を尽くしたいと切望する次第である。」

以上の考えのもと、昭和37（1962）年4月、晴れて工学部が多賀城の地に創設された。小田忠夫学長は孤高のキリスト者であった。昭和57（1982）年3月13日逝去。享年八十二才。仙台北山キリスト教共同墓地ではなく、こよなく愛した郷土、遠刈田青根を終焉の地とした。数々の功績に対して、昭和57年3月正四位勲二等瑞宝章受章。

［永井健三］

明治34（1901）年3月21日仙台市青葉区角五郎一丁目6で父徳寿、母いねの三男として出生。仙台市木町通小学校、旧制一中、二高をへて、東北帝国大学理学部（1年在籍）、同大学工学部電気工学科卒。大正14（1925）年4月3日、東北帝国大学講師、昭和9（1934）年8月「遅延導線網について」で工学博士の学位を取得。昭和11（1936）年6月、東北帝国大学教授。その後、電気通信研究所長歴任。昭和39（1964）年4月、東北大学名誉教授に推挙。同月、前掲の和田正信教授の勧めもあり、小田忠夫学長に招請され、東北学院大学工学部長に就任した。20年間在職。

永井健三

永井健三の「高周波デバイス法にもとづく磁気録音に関する研究」は、我が国の嚆矢となり、“ソニーの育ての親”とも云われる。井深大は何度も先生の研究室を訪れ、指導を仰いだという。

学友東海大学総長松前重義は、東北帝国大学工学部電気工学科での同期生で、生涯その交流は絶えることがなかった。松前は昭和40（1965）年に、井深は昭和42（1967）年に、東北学院大学工学部で講演をしている。永井の著書「伝送回路網学」は有名。特許も多く、米国からの流入を未然に止め、我が国の産業を守ったことは、高く評価されている。

昭和29（1954）年1月17日河北文化賞、昭和30（1955）年4月1日、紫綬褒章受章、昭和37（1962）年3月22日NHK放送文化賞、昭和46（1971）年3月10日、前島賞、同年4月29日、勲二等旭日重光章受章

永井健三の揮毫になる「創意工夫」の碑

現在の工学部キャンパス

と、数々の栄誉を受けている。永井健三は「創意工夫」を東北学院大学工学部の研究・教育の指標とし、教員並びに学生を督励した。永井の揮毫になる「創意工夫」の碑は、工学部の中庭に今も光り輝いて立っている。昭和59（1984）年4月、東北学院大学名誉教授に推挙される。平成元（1989）年7月17日逝去。享年八十九才。【永井は、門下生佐藤利三郎を第三代工学部長に推挙、後継とした。佐藤（利）は、昭和59（1984）年4月～平成11（1999）年3月まで、15年間在職】

むすび

東北学院はこれまで、4つの理工系教育機関を開設してきた。理科専修部は運営に未熟さがあり、2年で廃止となった。廃校命令を回避するために開設された航空工業専門学校は、3年制にもかかわらず、日本の敗戦で2年で廃校となるなど、悲運に見舞われた。これを払拭するかのように、昭和37（1962）年4月に創設された工学部は、平成24年4月で、50周年を迎える。

これまでの理工系教育機関の系譜とその人脈を顧みるとき、規模の大小こそあれ、教授陣には、日本に、そして世界に誇れる碩学が含まれ、卒業生には社会の重責を担った有用な人材が多く見受けられる。

小田忠夫学長が夢見た「クリスチャンエンジニアの養成」が、より一層現実のものとなり、工学部が更なる発展を遂げるためにも、教職員の働きに、大きな期待が寄せられている。

【参考文献】

⑴東北学院七十年史：東北学院創立七十年史編纂委員会（編集者：花輪庄三郎）、東北学院同窓会、昭和43年7月20日

⑵東北学院創立七十年写真誌（編纂者：花輪庄三郎）、東北学院同窓会、昭和30年5月1日

⑶東北学院百年史：東北学院百年史編集委員会、東北学院、平成元年5月1日

⑷東北学院百年史資料編：東北学院百年史編集委員会、東北学院、平成2年5月15日

⑸東北学院百年史各論編：東北学院百年史編集委員会、東北学院、平成3年5月15日

⑹東北学院の100年：東北学院創立100周年記念百年史編集委員会、プレスアート、昭和61年5月15日

⑺東北学院時報：第163号、昭和24年11月25日

⑻東北学院時報：第164号、昭和25年7月10日

⑼North Japan College（東北学院写真帳、全英文）、明治44年頃

⑽創造・科学・教育～フェライトの父加藤与五郎～同志社大学理工学研究所、平成13年4月

⑾畑井新喜司の生涯：蝦名賢造、西田書店、平成7年9月10日

⑿東北学院航空工業専門学校の誕生と萱場資郎：鶴本勝夫、東北学院資料室、Vol.8、平成19年12月31日

⒀技術の本質：宮城音五郎、明治書房、昭和18年12月25日

⒁小田忠夫・回想と追憶：東北学院編、創文社、昭和58年5月14日

⒂歯車と私：成瀬政男、成瀬政男先生喜寿記念出版会、筑摩書房、昭和51年5月10日

⒃永井健三先生：永井先生追悼記出版会、セルプラン、平成4年3月28日

鶴本 勝夫プロフィール TSURUMOTO, Katsuo

1942（昭和17）年、仙台市生まれ。
東北学院大学工学部機械工学科卒業（第1回生）。東北学院大学工学部助手、講師、助教授、教授を経て、現在東北学院大学名誉教授。

〔資料〕手紙より見た鈴木義男と佐々木惣一

東北学院大学経済学部教授
仁昌寺　正一

先に筆者は『大正デモクラシーと東北学院―杉山元治郎と鈴木義男―』（学校法人東北学院、2006年10月）の中の「鈴木義男」について調査・執筆する機会を得たが、その作業中の2004年5月20日、鈴木義男の孫である油井大三郎氏（当時は東京大学教授、現東京女子大学教授）にお会いし、鈴木義男が佐々木惣一に宛てた2通の手紙を拝見させていただいた。ここでは、これらの手紙を紹介しつつ、これまでの筆者の鈴木義男に関する研究を一歩進めたいと思う。

1. 鈴木義男と佐々木惣一について

本題に入る前に、鈴木義男と佐々木惣一がどのような人物であるかをみておきたい。

⑴ 鈴木義男

まず、鈴木義男（1894年～1963年）について簡単に紹介しよう。鈴木は、1894（明治27）年1月17日、福島県白河町（現白河市）田町に生まれた。1907（明治40）年3月に白河町尋常高等小学校を卒業後、同年4月には東北学院普通科（中学・5年制）に入学し、1912（明治45）年3月に同校を卒業した。その後、第二高等学校（仙台市）、東京帝国大学法学部に学び、1924（大正13）年には東北帝国大学法文学部教授に就任し、行政法の講義を担当した。1930（昭和5）年に同職を辞した後、東京で弁護士事務所を開業し弁護士活動を行うようになったが、このなかで、有澤廣巳や宇野弘蔵といった「労農派教授グループ」をはじめとする治安維持法違反事件被疑者の弁護を積極的に引き受けている。第2次大戦後には政治の世界に身を投じ、1946（昭和21）年の衆議院総選挙で福島2区から立候補して当選、以後1960（昭和35）年まで7回の当選を果たした。この間、1947（昭和22）年6月に片山哲内閣の司法大臣に、1948（昭和23）年3月には芦田均内閣の法務総裁（国務大臣）に就任している。その一方では、専修大学教授・理事長・大学長や青山学院大学教授も務めたほか、母校である東北学院においては、1947年7月に杉山元治郎の跡を継いで第6代理事長に就任し、以後1963年の長逝まで同職を務めている。

なお、鈴木の生涯やその活動についての詳細は、前掲の『大正デモクラシーと東北学院―杉山元治郎と鈴木義男―』を参照していただきたい。

⑵ 佐々木惣一

次に、佐々木惣一（1878年～1965年）について簡単に紹介しよう。佐々木は、1878（明治11）年3月28日、鳥取市西町に生まれた。鳥取一中、第四高等学校（金沢市）を経て、1899（明治32）年に京都帝大法科大学（後の法学部）に進学し、1903（明治36）年に同大を卒業した。卒業後ただちに同大学の講師に採用され、その後、助教授を経て教授に就任した。同大学では、1913（大正2）年から行政法の講義を担当していたが、1927（昭和2）年からは憲法学の講義も担当することになった。

佐々木は、大正デモクラシーの理論的指導者として活躍したといわれる。憲法学においては、当時東京帝国大学教授を務めていた美濃部達吉と並んで「東の美濃部・西の佐々木」と称されるほどの存在であり、大日本帝国憲法（明治憲法）の自由主義的解釈によって“天皇機関説”を唱道した（松尾尊兊『大正デモクラシーの群像』、岩波書店、1990年9月、231ページ）。また、吉野作造が『中央公論』の1916（大正5）年1月号に「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を発表して民本主義を提唱した一方で、佐々木も、同年1月1日から1月19日までの『大阪朝日新聞』に「立憲非立憲」を連載し、議会政治の正当性を論証した。つまり、期せずして同時期に、吉野が政治学による政治体制の立場から、佐々木が憲法学の立場から、政党内閣は君主制とは矛盾しないものであり、立憲政治発展の自然の結果として現出するものであることを論じたのであった（松尾尊兊『わが近代日本人物誌』、岩波書店、2010年2月、193ページ）。

佐々木はまた、「学問の自由と大学の自治」を擁

護するために奮闘した。1913（大正2）年7月23日、京都帝国大学総長の澤柳政太郎が同大7人の教授に対し辞表の提出を勧告したことから発生した「沢柳事件」においては、辞表の提出を促すことは教授の権限を侵害するものとして批判し、教授会の教官人事権の保有、及び大学総長の公選という大学自治の二本柱の確立のために尽力した（松尾尊兊、同書、189ページ）。また、1919（大正8）年12月、東京帝国大学経済学部の機関誌『経済学研究』に掲載された同大助教授の森戸辰男の論文が朝憲紊乱にあたるとして、森戸とともに同誌の発行責任者であった同大助教授大内兵衛が起訴されたことに端を発する「森戸事件」においても、佐々木は、学問の自由を守るべく、吉野作造、安倍磯雄、高野岩三郎とともに特別弁護人として法廷に立ったり、戦闘的自由主義知識人グループであった黎明会の一員として講演を行ったりした（松尾尊兊、同書、190ページ）。さらに1933（昭和8）年5月、当時の文部大臣鳩山一郎が京都帝国大学法学部教授の瀧川幸辰を“赤化教授”として休職処分にしたことに端を発した「滝川事件」でも、同処分の撤回をめぐって文部省と抗争した。そして同年7月11日には辞表を提出し、京都帝国大学を去ることになった。

その後、佐々木は、同年9月18日に立命館大学に迎えられ、翌1934（昭和9）年3月には同大学の総長に就任した。その一方で、憲法学者としての活動を続け、1945（昭和20）年10月には内大臣府御用掛として憲法改正調査を行い、「佐々木私案」を作成した。この私案は公表されなかったが、国民統合の体制として天皇制の国体は不変であることを前提にしながらも、政治を民主化させるという点に重点が置かれたものとして注目された（池田政章「佐々木惣一」、『日本大百科全書』10、小学館、1986年7月、119ページ）。

⑶ 2人の接点

ところで、このような経歴を持つ鈴木と佐々木の接点はどこにあったのだろうか。

2人の専門である行政法の分野についてみると、鈴木は、佐々木惣一から強い影響を受けていた。そのことは、鈴木が東北帝国大学の講義において、佐々木が1922（大正11）年に上梓した『日本行政法論』（総論及び各論）に依拠したプリントを作成・使用していたことからも明らかである。鈴木自身も、そのプリントの一部である『行政法講義案総論第三分冊』（1927年10月、非売品）の序言において、「本分冊ヲ編纂スルノ趣旨モ全ク前冊編纂ノ趣旨ト同一ニシテ、教室ノ所用ニ便センガタメニ**佐々木博士ノ許諾ヲ得テソノ日本行政法総論各論ヲ底本トシ**之ニ美濃部博士ノ所説並ニ他ノ学説判例等ヲ配シテ講義用ニ資スルモノナリ」と記述している（ゴシックは引用者による）。また、鈴木のこの年の講義を受講した木下彰のノートを翻刻した岩本由輝は、「木下氏のノートによりみて行くと、鈴木は東京帝国大学法学部で直接、教えを受けた美濃部達吉の行政法衛論には批判的で、**理論的には京都帝国大学法学部の佐々木惣一の諸説に傾倒している**ように思える」という感想を述べている（岩本由輝「翻刻・木下彰の受講ノート―鈴木義男教授・行政学総論―」、『創設者の事績を通してみる東北学院の建学の精神』、学校法人東北学院、2010年3月、96ページ、ゴシックは引用者による）。

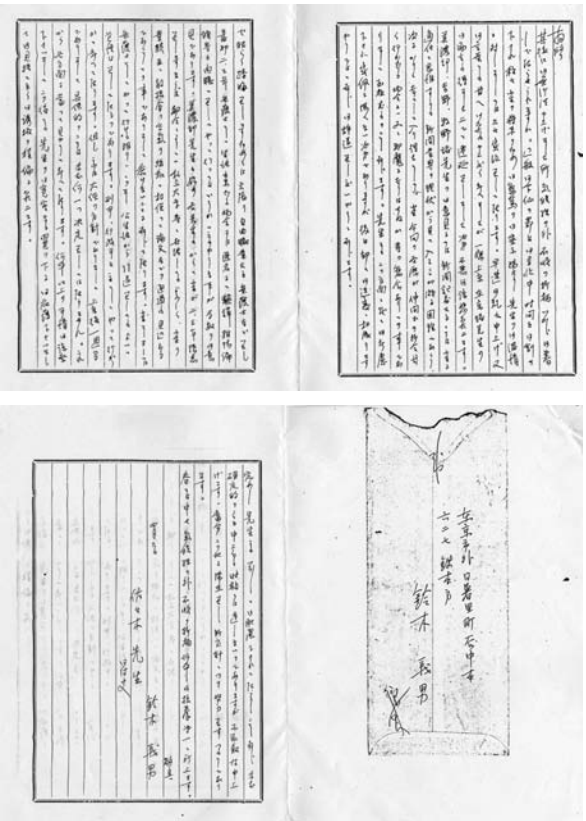
このほか、鈴木と佐々木は、さまざまな縁でつながっていたといえる。例えば、鈴木義男の東京帝国大学学生時代の恩師である吉野作造と佐々木とは、明治末のドイツ留学時に知り合ってから昵懇の間柄になっており、大正中期に起きた一連の反体制的運動でも行動を共にしていた。また、鈴木が弁護を行うことになる河上肇と佐々木とは、京都帝国大学で学問・思想などさまざまな面で意気投合し親交を温めていた（松尾尊兊『滝川事件』、岩波書店、2005年1月、343～365ページ）。いずれにせよ、鈴木を取り巻くこのような人間関係も鈴木と佐々木の親しい交流を可能にした要因として軽視できないように思われる。

2. 1930（昭和5）年4月3日に鈴木義男が佐々木惣一に宛てた手紙

ではここで、鈴木が1930（昭和5）年4月3日に佐々木惣一に出した手紙をみてみよう。

拝啓

其後は御無沙汰申し上げました所気候殊の外不順の折柄いかに御暮しで居らせられますか。過般は下仙の節は御多忙中時間を御割き下され種々の小生の将来のため御懇篤の御垂示賜はり先生の温情に対しましては只々感泣いたして居ります。早速御礼も申上げ又御言葉にも甘へ御願も申上げ度く考へましたが一応上京在京諸先生の御助言も得ました上でと遷延いたしました次第不悪御諒恕願上ます。美濃部、吉野、牧野諸先生の御意見にては新聞記者たることは小生に適任と思惟するも新聞業界の現状から見て入ることが頗る困難であらう。次にかりに幸にして入り得たとしても小生今回の経歴が仲間等の折合甘く



<資料1>1930（昭和5）年4月3日に鈴木義男が佐々木惣一に宛てた手紙

行かざる場合には又々邪魔になりはせぬか等の懸念ありとの事でありまして至極尤ものことと存じます。先生にもこの方面に就いて御考慮下され感佩に堪へない次第でありますが後日却て御迷惑に相成りますやうではと存じ御辞退居(ママ)し度いやうに存じます。

で暫らく躊晦いたしますためは矢張り自由職業たる弁護士などいたし最初二、三年弁護士として生活出来ざる場合には匿名にて飜譯雑誌編輯等を内職といたしてやって行ってはどうかと云うやうな事が多数の御意見であります。美濃部先生を始め各先生もかくて小生が二、三年隠忍いたしますならば都合によりては私立大学等に世話してもよろしく、小生の業績並教授会の空気の緩和と相俟って論文などの通過も見込あるであらうとの事でありまして忝けないことに存じて居ります。小生としましては弁護士としてやって行ける限りはこのまま公生活から引退いたしてもよいと覚悟はいたして居るのであります。刑事、行政事を主としてやって行かうかと考へて居ります。但し是は大体の方針でありまして上京後一週間でありまして具体的のことは未だ何一つ決定いたしては居りません。これから各方面に当って見やうと考へて居ります。何卒以上の事情の御諒察下さいましてこの後とも先生の御寛容なる翼の下に御庇護下さいまして御見捨てなく御誘拔の程偏に願上げます。

定めし先生にもいろいろと御配慮下されて居らるることと存じ未だ確定的のことを申上げる時期には達しないのでありますが不取敢右申上げます。当分この地に滞在いたし新方針につき努力いたすつもりであります。

春とは申せ気候殊の外不順の折柄何卒御摂養第一と祈申上ます。

敬具

四月三日　　鈴木　義男

佐々木先生

御侍史

このような内容の手紙からどのようなことが明らかになるだろうか。

第1に、「過搬」の「下仙」に関することであるが、京都に住んでいた佐々木惣一の来仙の理由は、東北帝国大学で鈴木義男が担当していた行政法の講義を代講するためであった。このことは、吉野作造の1930（昭和5）年3月1日の吉野の日記に、

晴　朝佐々木惣一君より電話かゝる　仙台より帰った所（行政法の講義に往ったのである――鈴木義男君辞表を出した為め）と云ふ　直ぐ来いと返事して待つやがて来る（『吉野作造選集』15巻、岩波書店、1997年、174ページ）

と書かれていることでも裏付けられる。佐々木の仙台市での滞在の期間は定かではないが、鈴木の手紙の中で「御多忙中時間を御割き下され種々の小生の将来のため御懇篤の御垂示賜はり」と記していることからすれば、恐らくは3月1日前の数日間ではなかったかと推察される。したがってまた、佐々木による東北帝国大学での講義も、数日間にわたる集中講義のようなかたちで行われたのではないか考えられる。

ちなみに、鈴木義男が東北帝国大学法文学部を辞職せざるを得なくなった理由は、1929（昭和4）年10月、突如として、鈴木義男の「著作権侵犯問題」が持ち上がったからであった。それによれば、鈴木が、東京帝大の蠟山政道助教授の著書を抜粋して作成した講義プリント（『政治学講義案』）を市販していたというのがその内容であった。しかし、このプリントの序文には、「公刊して世に問うべきものではない。只学生筆記の労と説明の時間とを節せんがために印刷に付するものである」と記述され、鈴木に公刊（市販）する意思がなかったことから、なんらかの手違いがあったようである。また、「畏友蠟

山政道学士に負ふ所が特に多い」とも書かれており、無断引用ともいえなかった。にもかかわらず、この問題が新聞に大々的に報道されたため、鈴木は東北帝大の退職を余儀無くされたのであった。その意味では、鈴木にとって、まさしく「不本意な出版事件」（『宮城県百科事典』）であった。かくして、鈴木は「責任を感じて辞表の提出もいたした」（「衆議院会議録情報」第002国会、本会議第65号）のであった。

第2に、鈴木は、佐々木から、新聞社に入社し新聞記者として身を立てることを勧められていたことがわかる。そして、そのために、1930年3月末から4月始めまでの「上京後一週間」、学生・助手時代の恩師である吉野作造、美濃部達吉、牧野英一を次々に訪問し助言を求めていたのである。

この間、3月29日の夜に吉野作造を訪問したことは、当日の吉野の日記に、

> **夜鈴木義男君来訪　数時間懇談す　例の事件につき頗る河村君に含む所あるものの如し　四月一日附にて辞表を出し直に聴許になる筈なりと云ふ　先き先きは東京にて弁護士をやる考らし　差当り生活にも困るらしい話なり**（『吉野作造選集』、岩波書店、1997年、180ページ）

と記されていることからも明らかである。

その結果、治安維持法下でさまざまな制約を課されつつあった「新聞業界の現状」や、鈴木が「不本意な出版事件」で退職せざをえなくなった「今回の経歴」を考慮すれば、鈴木が新聞社に入社してもうまくいかないことが恩師たちの多数意見であることから、「御辞退居し度い」という意志が伝えられている。そしてその上で「自由職業たる弁護士」になりたいこと、そのためには「二、三年、隠忍」の生活もやむをえないと考えていることが伝えられている。

なお、その直後の1930年6月15日、鈴木は東京市麹町区四番丁11番地に弁護士事務所を開設した。弁護士として新たな一歩をふみ出したのである。

3. 1933（昭和8）年9月13日に鈴木義男が佐々木惣一に宛てた手紙

もう一通の手紙は次の通りである。

> **拝啓**
> **其後は御無沙汰申シ候處先生には益々御健勝の由何よりの事に存上候此度の京大事件に際しては正しき学徒としての態度を持され終始一貫理義透徹学の自由と独立のために御健闘被下候事我々後進として遥かに感激推服至し居り候自由主義闘争史上に花と散れ候雖もその後世に遺す影響並に全日本に與へたる道義的影響は至深ものと信じ上候今後の先生の御行路に就ては小生共も深く思を致し居り候雖何卒御自重被下最も意義ある方面に御活躍祈願候此度河上博士のために作田先生を通して與へ被下候御忠言に対しても奉感謝候御高見の通り相運び申可能候呉々も先生の御健勝願上候敬具**
>
> **九月一三日　　鈴木　義男**
> **佐々木　惣一先生**
> **御侍史**

＜資料2＞1933（昭和8）年9月13日に鈴木義男が佐々木惣一に宛てた手紙

みられるように、鈴木は、「京大事件」を「自由主義闘争史上に花と散れ候雖もその後世に遺す影響並に全日本に與へたる道義的影響は至深もの」と位置付け、この事件での佐々木の行動を「正しき学徒としての態度」と讃えている。

では「京大事件」とはどのようなものであったのか、その中で佐々木はどのような行動をとったのだろうか。くり返しになるが、ここでもう一度述べておこう。

「京大事件」は「滝川事件」とも呼ばれ、1933（昭和8）年5月26日、斎藤実首相が、京都帝国大学法学部教授瀧川幸辰の休職処分を発令したことに端を発するものであった。それより以前に政府は、京都帝国大学法学部で刑法を担当していた瀧川を「赤化教授」としてリストアップしており、1932（昭和7）年10月に瀧川が行った講演を共産主義的であると批判した。また1933年4月には、瀧川の著書『刑法講義』、『刑法読本』を発禁処分にしていた。このような経緯を経てなされた瀧川の休職処分措置

に対し、京都帝国大学法学部の教授たちは、1914（大正3）年の「沢柳事件」以来の大学自治の慣行を否定するものであるとして激しく反発し、教授、助教授をはじめ副手に至るまで32名の全教官が小西重直総長に辞表を提出した。この件についての学生たちの抗議運動も広がり、6月6日には全学学生大会も開かれた。しかしながら、その後、京都帝国大学では法学部以外の教授会の支持を得るまでには至らなかったほか、京都帝国大学以外の大学、とくに東京帝国大学でも支援の動きが活発化することはなかった。かくして6月17日には小西総長は辞意を表明し、7月7日には後任の総長に松井元興が就任した。そのため、事件は急速に終息に向かうこととなり、結局、佐々木を含む6人の教授が免官となり、他の教授8人が残留することになった。（松尾尊兊「京都大学滝川事件」、『昭和ニュース事典』Ⅳ〔昭和8年／昭和9年〕、毎日コミュニケーションズ、28-31ページ）。

この間、佐々木は、法学部教授団の抗議運動の主柱となって奮闘したが、後年、この事件について次のように回顧している。

> **著者（佐々木惣一のこと……引用者）は当時京都大学―京都帝国大学と呼ばれていた―教授として、法学部において、憲法及び行政法を講じていたが、偶々昭和八年初め、同大学瀧川幸辰教授の一著書に対する官憲の措置に関連して、京都帝国大学教授一同と政府との間に、研究の自由及び大学の自治に関する意見の衝突起り、同年五月二十六日、教授一同はその職責を重んじて辞表を呈出した。七月十一日に至り、一部教授のみの辭職が聴許された。その中に加えられて、著者は京都大学と袂を分った。これが世間にいわゆる京大事件である。学生としてそこに学び、卒業してすぐそこで職員として勤め、そこで一心に仕事をして来た、その大学とわかれる著者は、勿論感慨無量であった。**（佐々木惣一『改訂日本國憲法論』、有斐閣、1952年2月、改訂版序）

佐々木によるこの記述は、この事件に対する心情を発露したものとして興味深い。

ともあれ、鈴木義男は、さきに紹介した手紙において、佐々木がこのようなかたちで「学の自由と独立のために御健闘」したことを「正しき学徒としての態度」と評したが、このようなことばにこそ、鈴木義男の思想的位置づけが顕著に表れているといっても過言ではない。鈴木が、東北帝国大学辞職（1930年5月）から3年余経過したこの段階でも、大正デモクラシーと呼ばれることになる進歩的な潮流の中に身を置いていたことを確認しえよう。

ところで、この手紙に「河上博士のために作田先生を通して與へ被下候御忠言に対しても奉感謝候」と書いてあるように、鈴木は、佐々木惣一が河上肇のことで京都帝国大学の同僚の作田荘一教授を通して「忠言」を与えてくれたことに「感謝」している。この「忠言」の内容は、この手紙からはわからないが、鈴木が担当していた「河上肇事件」の弁護のしかたに関することであった可能性が大きい。

ここで、この事件のあらましを簡単に説明しよう。河上肇は、「日本におけるマルクス主義経済学の先駆者」（『日本近現代人物辞典』）としてよく知られ、『貧乏物語』や『資本論入門』をはじめ、多数の著書を執筆している。1928（昭和3）年に文部省から「左傾教授」として辞職勧告を受けて辞職して以降は、実践運動に深く介入していった。その後、1931（昭和6）年6月から共産党に資金援助を行うようになり、9月には正式に共産党に入党した。しかし、同年10月からいわゆる新生共産党の大検挙が始まり、翌年1月に河上も検挙された。同（昭和8）年8月、河上は治安維持法違反者として公判に付されることになったが、このとき、河上の弁護を担当したのが鈴木義男であった。その後、河上は、第一審で懲役五年の判決を受け、刑に服し（『日本政治裁判史録　昭和・前』、第一法規、551ページ）、刑期を終えたのが1937（昭和12）年6月16日であった（この中での鈴木義男の精力的な弁護活動については、仁昌寺正一「弁護士時代の鈴木義男―河上肇の弁護―」（『河上肇記念会報』NO.91、2008年7月）に詳細に記述しているので、そちらを参照していただきたい。）。

ちなみに、作田荘一と河上肇は、河上が作田を山口高等商業学校から京都帝国大学にスカウトしてきた経緯があり親しい関係であった。また、既述のように、河上肇と佐々木惣一も昵懇の仲だった。こういう人間関係があったからこそ、佐々木は、河上の弁護方法に関する鈴木への「忠言」を作田に届けさせたのであろう。

おわりに

この2通の手紙から、鈴木と佐々木の関係がどのようなものであったかを簡単にみてきたが、むろん、この2人の関係の全体像を明らかにするためには、これらの資料だけでは限界がある。今後、もっと視野を広げて考察してみる必要があることはいうまもない。

その際、例えば、鈴木義男と佐々木惣一の日本国

憲法第9条のいわゆる「戦争の放棄」に関する解釈を比較・検討してみることも興味深いといえる。筆者がみたところでは、両者ともに、国際法や国際関係からみた場合の日本の自衛権の存在を強調し、自衛のための戦力を保持するのは当然という立場に立っている。両者の著書の中の文言をみてみると、鈴木義男は、「自衛権といふのは国際法上各国がもって居ると思はれて居る権利であって、日本も国際社会の一員たる以上、独立国として認められる限りは自衛権はあるといはなければならぬ」（鈴木義男『新憲法読本』、鱒書房、1948年4月、36-37ページ）と述べ、佐々木も、「他国から突如不法の攻撃を受けて、自衛上、これに対抗して戦争することは憲法上差し支えない」（佐々木惣一、『改訂　日本國憲法論』、有斐閣、1952年2月、233ページ）と述べているのである。

〔参考文献〕

佐々木惣一編『京大事件』、岩波書店、1933年11月。

佐々木惣一『改訂　日本国憲法』、有斐閣、1952年2月。

松尾尊兊『わが近代日本人物誌』、岩波書店、2010年2月。

松尾尊兊『滝川事件』、岩波書店、2005年1月。

松尾尊兊『大正デモクラシーの群像』、岩波書店、1990年9月。

『大正デモクラシーと東北学院―杉山元治郎と鈴木義男―』、学校法人東北学院、2006年10月。

『創設者の事績を通して見る東北学院の建学の精神』、学校法人東北学院、2010年3月。

鈴木義男『新憲法読本』、鱒書房、1948年4月。

仁昌寺正一「鈴木義男と吉野作造―一つの覚書き―」、『吉野作造研究』第4号、2008年8月。

仁昌寺正一「弁護士時代の鈴木義男―河上肇の弁護―」、『河上肇記念会報』NO.91、2008年7月。

仁昌寺 正一プロフィール　NISHOJI, Shoichi

1950（昭和25）年生まれ。
東北学院大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学。
東北学院大学経済学部助手、講師、助教授を経て現職。

東日本大震災における資料室の被災状況

2011年3月11日午後2時46分に発生した大地震は、マグニチュード9.0の観測史上最大級のものでした。東北から関東の沿岸部を中心に2万人もの人が犠牲になり、本院においても新入学予定者を含めた犠牲者は、大学で7名（内、行方不明者2名）、中学校・高等学校で4名を数えております。施設設備も全てのキャンパスで大きな被害を受けました。

資料保管室

地震発生時、資料室には見学者はなく、人的被害はありませんでした。展示室には約200点の資料を展示しておりましたが、数枚の写真パネルの落下と展示ケース内の資料の多少の乱れで済みました。保管室内の書架に並べた資料類は多数床面に散乱しましたが、ガラスキャビネット内の貴重書と中性紙箱に納めていた書類は落下することなく無事でした。幸い2009年夏に資料室内の4本の柱に耐震補強工事を施していたこと、キャビネットなどのガラスの補強工事が終わっていたこと、何よりも展示室、資料保管室が地下に位置していたことが資料の被害を最小限にとどめた最大要因であったと思われます。

しかし、資料室（地階）の上の礼拝堂は大きな被害を受けました。天井部分は崩落、ガラス窓は破損。これに従来からあった木下地の一部腐敗も合わせて全面修復工事を行うことになりました。それに伴い資料室も震災直後から立入禁止となり、保存資料の被害状況の把握が遅れてしまいました。全ての資料室復旧作業が終わったのは、礼拝堂の修理が完了した後期授業開始の9月20日以降になります。

今後は、学内各部署で作成されている被災状況や復旧作業に関する記録の保存に努め、後世に伝えていく必要があります。将来、どのようにすれば被害を最小限にくい止めることができるのか、どのようにして東北学院は復興したのかを永く共有できるアーカイブズとして残していかなければなりません。

資料保管室

礼拝堂天井

礼拝堂修復（外観）

礼拝堂修復（内部）

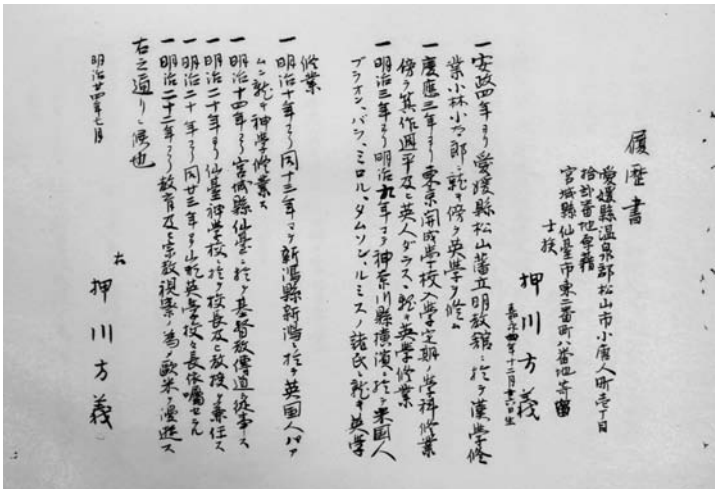
展示室内

熊三郎産髪包紙銘記

嘉永2年12月5日出生　熊三郎産髪

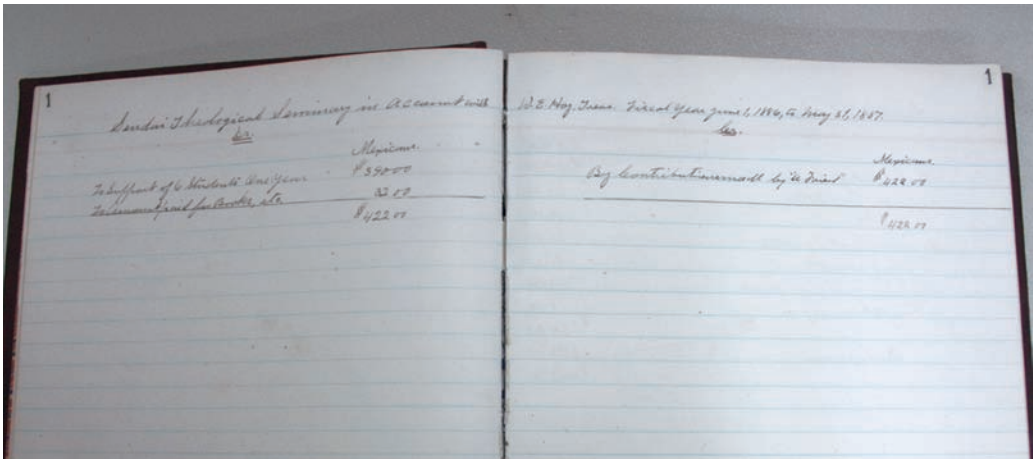
仙台神学校（後の東北学院）創設者押川方義（幼名 熊三郎）の出生直後に剃った頭髪です。1986年に方義の孫、押川昌一氏から寄贈されました。同家に保存されてきた鎧櫃の中から偶然見つかったものです。押川の実父橋本宅次（昌之）の筆跡によるこの新資料の発見によって、押川方義の生年月日は、嘉永2年12月5日（西暦1850年1月17日）と確定することができました。

従来、押川方義の生年月日については、明治24（1891）年7月14日付で宮城県庁経由文部省に提出された「私立東北学院設置願」に含まれる教員履歴書記載の、嘉永4年12月16日や嘉永2年など複数の説がありました。



「私立東北学院設置願」に含まれる押川方義履歴書

Sendai Theological Seminary in Account with W. E. Hoy, Treas.
（仙台神学校会計収支書）



<Fiscal Year June 1, 1886 – May 31, 1887>

Dr.

	Mexicans.
To Support of 6 Students One Year	$ 390.00
To Amount paid for Books, etc.	32.00
	$ 422.00

Cr.

	Mexicans.
By Contribution made by “A Friend”	$ 422.00
	$ 422.00

これは在日宣教団の会計簿です。このページには1886年6月から翌87年5月までの、仙台神学校創設初年度の収支が記録されています。

支出総額は422メキシコ銀ドル。その殆どを占めるのが「6人の学生を1年間支えるために」という項目の390メキシコ銀ドル。それ以外の支出は、「図書その他」の32メキシコ銀ドルです。他方、収入の部は一項だけで、「ある友人」よりの献金422メキシコ銀ドルとなっています。この「ある友人」とは他ならぬウィリアム・E・ホーイ自身でした。仙台神学校の初年度の経費は、ホーイのこの匿名の献金によって賄われたのです。

その後もホーイは、増加する学生のため私財を投じ、教場や寄宿舎の建設にあてます。このホーイの熱意・献身と押川方義の尽力とが結びつき、「東北学院」の創設が実現したのです。

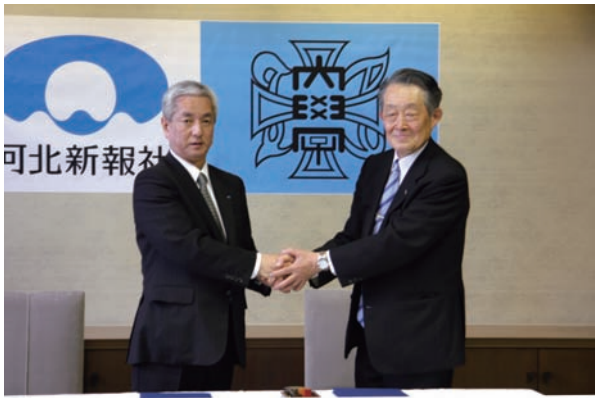
東北学院大学、河北新報社・仙台商工会議所と包括提携

5月20日、東北学院大学と河北新報社は、地域力向上と人材育成に向けて連携する基本合意書を調印した。

基本合意は、地域に立脚する教育機関と報道機関としての特性を生かした活動を通じて、連携・協力して東北の「地域力」の向上を目指すことを目的としている。

本年度は「震災からの復興創生」を中心テーマに据えて連携事業を展開する。シンポジウムの開催や高い学力向上が期待できるNIEを中高大で実施するなどの具体的な事業が行われる予定である。

河北新報社一力雅彦社長（左）と東北学院大学星宮望学長


調印を終えて握手をする両氏

6月22日、東北学院大学と仙台商工会議所は包括連携に関する協定締結を行った。協定では、大学の「知」を生かした学生参加型の産業・観光振興、地域づくりや国際交流に関すること、地域活性化の推進に関することなどが盛り込まれている。具体的には、「東北六魂祭」や「仙台七夕まつり」などへの学生ボランティアの参画、大学留学生の在仙企業へのインターンシップ参加など東北・仙台地域のビジネスに関する国際化・国際交流の相互推進についても言及された。

調印する仙台商工会議所鎌田宏会頭（左）と東北学院大学星宮望学長

握手を交わす両氏

緊急シンポジウム「復活と創造　東北の地域力」開催

東日本大震災からの再生を考えるシンポジウムが6月18日、泉キャンパス礼拝堂で開かれ、市民や学生など約1,200人が参加した。主催は東北学院大学と河北新報社。5月の連携調印を受けた初の事業開催となった。

シンポジウムに先立って、経済評論家の内橋克人氏による基調講演が行われた。シンポジウムでは内橋氏、一力雅彦河北新報社社長、星宮望東北学院大学学長の3人が「東北再生のために私たちがなすべきこと」をテーマに意見交換をした。

内橋克人氏

総合人文学科創立記念式典開催

キリスト教に基づく人間形成を中心として、他者との相互理解・共生を可能とする強固な知的・精神的基礎をもった人材を育成することを目的に、総合人文学科は本年4月に新たに生まれた。「対話」を重視した少人数・双方向型の教育に大きな特色がある。

総合人文学科創立を記念して、6月18日、泉キャンパス礼拝堂において、新入生40名と本学関係者合わせて約80名が会し、厳かな式典が行われた。

平河内健治理事長は式辞の中で、東北学院創設者のひとりであるウィリアム・E・ホーイが開院式で述べた教育の目標を紹介し、東北学院開院のちょうど120年後に、歴史的使命と責任を担う総合人文学科が誕生したことに神の摂理を感じる、と述べた。

記念式典に臨む総合人文学科新入生

一堂に会した総合人文学科関係者

中高大一貫教育事業に関する協定締結

7月7日、東北学院大学と東北学院中学校・高等学校並びに東北学院榴ケ岡高等学校との中高大一貫教育事業に関する協定締結式が行われた。

この事業は、東北学院の建学の精神に基づいた教育理念を礎とし、人格、知力及び学力を備えた魅力あふれる人材を輩出し、社会に貢献することを目的としている。

【中高大一貫教育事業の内容】

⑴　学生、生徒及び教職員の授業・課外活動等における相互交流・支援
⑵　TG推薦入学者等への入学前教育及び入学後の指導・支援
⑶　東北学院高等学校並びに東北学院榴ケ岡高等学校から東北学院大学へ進学する生徒及び入学後の学生の学習状況等の調査
⑷　東北学院大学への進路指導及び進学啓発に関する研究・協議・協力
⑸　一貫教育に関するカリキュラム及び入学前既修得単位認定等に関する研究・協議
⑹　その他、中高大一貫教育事業に関して必要な事項

左から永井英司中学校・高等学校長、星宮望大学長、久能隆博榴ケ岡高等学校長

東北学院創立125周年記念事業

姜尚中東京大学大学院教授特別講演会

東日本大震災から6カ月が経過した9月10日、土樋キャンパス押川記念ホールにおいて、「東北学院創立125周年記念・東北学院大学文学部総合人文学科創設記念姜尚中教授特別講演会」が開催された。東京大学大学院の姜尚中教授による「生き抜く力」と題した講演は、歴史、生物、芸術の幅広い視野から、東日本大震災後の苦難にどう立ち向かうべきかを考え、さらに、教授が震災後に訪れた福島県の被災地での見聞や、被災者へのインタビューの状況を織り交ぜながら約100分間、800名の聴衆を魅了した。

姜尚中東京大学大学院教授

「民族歌舞の保存と伝承－報告と表演」開催

10月14日、東北学院創立125周年記念事業の一環として、少数民族の伝統的な芸能の保存と伝承のあり方を探るシンポジウムが開催された。参加者は現地の歌声と演奏を身近に楽しみながら、アジア伝統楽舞の保存と伝承について学んだ。

午前中は中国より招いた胡家豪氏（恩施自治州博物館館長）が「中国恩施土家族の伝統歌舞」と題して講演。午後からは大学院アジア文化史専攻の院生による現地調査報告があった。その後、アイヌ民族伝統音楽や湖北民族歌舞団による歌唱披露で会場は笑顔と大きな拍手に包まれた。

表演者の皆さんとの記念撮影

東北学院フェスティバル

幼稚園児による合唱

11月5日、東北学院創立125周年を祝う、全学による音楽の祭典「東北学院フェスティバル」が開催された。泉キャンパス礼拝堂は本院の園児、生徒、学生たちによる演奏と合唱の豊かな音色に包まれた。

フェスティバルのオープニングは、幼稚園年長児65人の元気な歌声からスタート。第1部は各校がそれぞれの演奏を披露、伝統ある大学のSWE（シンフォニック・ウィンド・アンサンブル）、今年度全日本マーチングコンテスト東北大会で銀賞を受賞した中学・高校吹奏楽部の演奏、榴ケ岡高校音楽部と吹奏楽部の演奏が繰り広げられた。

第2部は、中学生から大学生までの吹奏楽部員、合唱部員、聖歌隊の総勢120人に、本学礼拝オルガニスト小野なおみ氏のパイプオルガンが加わるという、本学ならではの構成によるステージに大きな拍手が送られた。

フィナーレの曲は東日本大震災の応援歌「あすという日に」。鳴り止まない拍手に応えたアンコールでは、125周年を記念してあらたに編曲された「校歌」が礼拝堂に響いた。

榴ケ岡高校吹奏楽部

大学SWEの演奏

中学校・高校吹奏楽部

オール学院による合同演奏

時　事

2011年4月～2012年3月

		東北学院に関する主な時事
2011年 4月	1日	東北学院大学は認証評価機関である財団法人大学基準協会が定める大学基準に適合していると認定された ※認定期間：平成23（2011）年4月1日～平成30（2018）年3月31日の7年間
	16日	榴ケ岡高等学校入学式
	17日	幼稚園卒園式
	18日	「東北学院大学の復興に向けた全学の集い」開催
	22日	中学校新1年生オリエンテーション
	23日	高等学校新1年生オリエンテーション
	25日	幼稚園入園式
	27日	大学新入生オリエンテーション（～30日）
	28日	中学校・高等学校入学式／榴ケ岡高等学校奨学会総会
5月	6日	幼稚園PTA総会
	9日	大学授業開始
	13日	TG十五日会
	14日	創立125周年記念式／墓前礼拝
	20日	東北学院大学と河北新報社との連携に関する基本合意書調印式
	21日	中学校・高等学校奨学会総会
	24日	中学校・高等学校運動会
6月	1日	6月1日付人事異動に伴う辞令交付式
	4日	県高等学校総体（～6日）
	11日	市中学校総体（～13日）
	15日	TG十五日会
	18日	大学後援会総会／総合人文学科創立記念式典／緊急シンポジウム「復活と創造　東北の地域力」開催
	22日	東北学院大学と仙台商工会議所との包括連携に関する協定締結式
	23日	大学進学指導者懇談会
6月	24日	対北海学園大学総合定期戦（北海学園主管）（～26日）
	25日	学部オープンキャンパス：文学部・経済学部・経営学部・法学部（土樋）、工学部（多賀城）
	27日	ジョン・V・ルース駐日米国大使が来校
7月	2日	教養学部オープンキャンパス（泉）
	6日	名誉教授称号記授与式
	7日	東北学院大学と東北学院中学校・高等学校並びに東北学院榴ケ岡高等学校との中高大一貫教育事業に関する協定締結式／FD研修会開催
	9日	中学校・高等学校オープンキャンパス
	15日	TG十五日会
	21日	大学院特別選考入学試験（A日程）
	29日	大学院特別選考入学試験（A日程）合格発表
	30日	全学オープンキャンパス（泉）／（多賀城～7月31日）
8月	2日	日本私立大学団体連合会・日本私立短期大学主催シンポジウム開催
	10日	大学夏休開始（～9月17日）第37回大学宗教部「サマー・カレッジ」開催（～12日）
	12日	全学職員研修
	20日	榴ケ岡高等学校オープンキャンパス
	27日	対北海学園大学二部総合定期戦（東北学院大学主管）／法科大学院前期日程入学試験（～28日）／幼稚園オープンキャンパス
9月	2日	対青山学院大学総合定期戦（東北学院大学主管）（～4日）／榴ケ岡高等学校“榴祭”（～3日）
	6日	サヴォア大学（フランス）と学生交換協定締結
	9日	法科大学院前期日程入学試験合格発表
	10日	総合人文学科創設記念姜尚中特別講演会開催／中学校・高等学校“学院祭”（～11日）
	15日	TG十五日会／東北学院サテライトステーション開所式

東北学院に関する主な時事		
9月	17日	幼稚園運動会
	20日	大学授業開始
	24日	大学院特別選考（B日程）入学試験および一般（秋季）入学試験
	30日	大学院特別選考（B日程）入学試験および一般（秋季）入学試験合格発表／9月期卒業証書・学位記授与式
10月	4日	大学秋季宗教教育強調週間特別伝道礼拝（～5日）
	9日	工学部祭・泉キャンパス祭（～10日）／工学部・教養学部オープンキャンパス（～10日）
	13日	編入学試験（A日程）
	14日	TG十五日会／六軒丁祭（～16日）
	15日	ホームカミングデー開催
	21日	編入学試験（A日程）合格発表
11月	4日	仙台市泉区における大学と地域の連携協力に関する協定締結
	5日	東北学院創立125周年記念「東北学院フェスティバル」開催
	8日	大学推薦入試
	15日	TG十五日会
	18日	推薦入試合格発表
	19日	東北学院文化講演会2011（盛岡）
	24日	FD講演会
12月	2日	泉キャンパスクリスマス（公開）
	6日	被災された同窓会支部及びTG会へ支援金贈呈式
	9日	中学校・高等学校公開クリスマス
	10日	「市民フォーラムー東日本大震災からの復興と安全なまちづくりのためにー」多賀城市と共同開催
	15日	TG十五日会
	16日	第62回公開東北学院クリスマス／幼稚園クリスマス
	21日	大学冬休開始（～2012年1月4日）
	22日	榴ケ岡高等学校クリスマス

東北学院に関する主な時事		
2012年1月	6日	中学校入学試験
	7日	中学校入学試験合格発表
	13日	TG十五日会／外国人留学生歓送会開催（大学）
	14日	大学入試センター試験（～15日）
	28日	法科大学院後期日程入学試験（～29日）／保護者との就職懇談会（多賀城キャンパス）
2月	1日	大学一般入学試験前期日程（～3日）／高等学校入学試験
	3日	榴ケ岡高等学校入学試験
	4日	高等学校入学試験合格発表
	7日	榴ケ岡高等学校入学試験合格発表
	10日	法科大学院後期日程入学試験合格発表
	11日	大学一般入学試験前期日程・センター試験利用入学試験前期・外国人留学生特別入学試験合格発表
	14日	TG推薦誓約式
	15日	TG十五日会
	16日	大学院春季入学試験（～17日）
	24日	大学院春季入学試験合格発表
3月	1日	高等学校卒業式／榴ケ岡高等学校卒業式
	5日	転学部・転学科試験、編入学試験B日程、社会人特別入学試験B日程、再入学試験
	6日	大学一般入学試験後期日程
	11日	東日本大震災追悼礼拝／「東日本大震災東北学院1年の記録」発行
	13日	大学一般入学試験後期日程、センター利用入学試験後期、社会人特別入学試験B日程、編入学試験B日程、転学部・転学科試験合格発表
	15日	卒園式／TG十五日会
	24日	中学校卒業式
	26日	卒業・学位記授与式

受贈資料一覧

2011年4月～2012年3月

日　付	寄　贈　者	受　贈　資　料
2011.4	仁昌寺正一	キリスト教教育と近代日本の知識人形成：東北学院を事例にして
2011.4	キリスト教学校教育同盟	加盟校の歩み　創立の礎
2011.5	学校法人拓殖大学	東洋文化協會五十年史稿：台湾・東洋協会研究
2011.5	東京農業大学図書館	生誕150年記念　横井時敬の遺産
2011.5	京都大学大学文書館	『戦後学生運動関係資料』Ⅲ　解説・目録
2011.5	京都大学大学文書館	京都大学の歴史
2011.6	日本基督教団野辺地教会	野辺地教会百年誌
2011.6	追手門学院大学大学事務部記念資料室	追手門の歩み：世紀をこえて
2011.6	仙台市	仙台市史　通史編8　現代1
2011.6	品川久男	東北学院専門学校時代の教科書など5点
2011.6	学校法人拓殖大学	拓殖大学百年史　昭和前編
2011.6	仙台東一番丁教会	仙台市一番丁教会史（復刻版　25年史・50年史）
2011.6	東北学院大学ボランティア・ステーション	The Great East Japan Earthquake and Tsunami
2011.7	広島大学文書館	広島大学文書館所蔵　沖原豊関係文書目録
2011.7	広島大学文書館	広島大学自校史教育実施報告書　2001-2010（上巻）
2011.9	学校法人女子美術大学	女子美術大学創立110周年記念略年史　女子美百十年 1900-2010
2011.10	九州大学百周年記念事業委員会	九州大学百年史写真集
2011.10	日野哲	野球体育博物館の押川清肖像写真など4点
2011.11	関西学院大学博物館開設準備室	戦後演劇の世界：大阪労演とその時代Ⅰ　1949-1959
2011.11	宮城学院同窓会	苦難の時を越えて：戦中・戦後の卒業生へのアンケート集
2011.11	学校法人中央大学	中央大学創立125周年記念展示図録：学びのたから　中央大学の起源・絆・記憶
2011.11	淑徳大学長谷川仏教文化研究所	近代日本における感化教育の黎明期：東京感化院と千葉感化院
2011.11	淑徳大学	Not for him, But together with him：宗教・社会福祉・教育の三位一体による人間開発・社会開発
2011.12	京都ノートルダム女子大学	京都ノートルダム女子大学創立50周年記念誌
2012.1	志子田光雄	東北学院油絵3点
2012.1	小野昭	小野坦関係文書40点
2012.2	日本基督教団須賀川教会	恩寵の120年：須賀川教会伝道開始120年記念誌
2012.2	庄司一幸	日本基督教団須賀川教会120年史
2012.3	金菱清	3.11 慟哭の記録：71人が体感した大津波・原発・巨大地震
2012.3	学校法人東北学院	東日本大震災東北学院1年の記録
2012.3	賀川豊彦記念・松沢資料館	雲柱社創立70周年記念　雲の柱に導かれて：雲柱社の歩み
2012.3	小川澄夫	小林彦太郎日記・他

※他逐次刊行物類多数をご寄贈いただきました。感謝申し上げます。

東北学院資料室規程

（設置および名称）

第１条　本院に、東北学院資料室（以下「資料室」という。）を置く。

（目的）

第２条　資料室は、本院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、本院の発展に資することを目的とする。

（事業）

第３条　資料室は、第２条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

一　資料の収集、整理、および保存に関すること。
二　資料に関係する刊行物の編集および出版に関すること。
三　資料の展示および公開に関すること。
四　資料の閲覧および貸出に関すること。
五　資料に関係する情報の提供に関すること。
六　その他、必要と認められる事業に関すること。

（運営委員会の設置）

第４条　資料室の事業を運営するため、東北学院資料室運営委員会（以下「運営委員会」という。）を設ける。

（運営委員会の構成）

第５条　運営委員会は、次の者をもって構成する。

一　学院長
二　総務担当副学長、宗教部長、総務部長、総務部次長、総務課長
三　中学校・高等学校副校長１名、榴ケ岡高等学校副校長、中学校・高等学校事務長、榴ケ岡高等学校事務長、幼稚園教頭
四　法人事務局長、庶務部長、広報部長、庶務課長、広報課長

２　運営委員会は学院長が招集しその議長となる。
３　運営委員会のもとに、必要に応じて実務委員会を設けることができる。実務委員は、運営委員会の議を経て委員長が任命する。
４　運営委員会の事務は、広報課が行う。

（資料室の管理・事務）

第６条　資料室の管理・事務は、広報課がこれを行う。

（規則の改廃）

第７条　本規程の改廃は、運営委員会の議を経て理事会が行う。

附則

本規程は、2001（平成13）年４月１日から施行する。

附則

本規程は、2003（平成15）年４月１日から一部改正施行する。

附則

本規程は、2011（平成23）年３月９日から一部改正施行する。

東北学院の沿革

年　代	歴代役職者	事　　項
1886(明治19)年		W.E.ホーイ仙台着任（１月）。押川方義、W.E.ホーイ両名により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「仙台神学校」開設（５月）。教師２名、生徒６名で始まった。E.R.プルボー、M.B.オールトが来日（７月）、宮城女学校を創立（９月）。
1887(明治20)年		東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙台神学校を移転（５月）。
1888(明治21)年		D.B.シュネーダー夫妻仙台着任（１月）。オールト記念館落成（11月）。
1891(明治24)年	押川方義	南町通りに仙台神学校校舎が完成（９月）。校名を「東北学院」と改称し、神学生のみに限らず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科２年・本科４年・神学部３年とする。
1892(明治25)年	W.E.ホーイ	労働会創設（３月）。東北学院理事局を組織、初代院長に押川方義、副院長・理事局長にホーイ就任（８月）。東北学院開院式（11月）。
1895(明治28)年		予科・本科を改組し、普通科５年、その上に専修部（文科・理科）２年を設置。
1896(明治29)年		島崎春樹（藤村）、作文・英語教師として着任。
1898(明治31)年		理科専修部を廃止。
1900(明治33)年	D.B.シュネーダー	第２代理事局長にD.B.シュネーダー就任（10月）。
1901(明治34)年		第２代院長にD.B.シュネーダー就任。普通科長に笹尾粂太郎就任（４月）。普通科に制帽を制定。徽章ＴＧ章制定。
1903(明治36)年	笹尾粂太郎	東北学院同窓会結成。
1904(明治37)年		全校を普通科（５年）と専門学校令による専門科（３年）とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任（４月）。
1905(明治38)年	田中四郎	専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。東二番丁に普通科校舎完成。専門部に角帽を制定。徽章は全校ＴＧ章を用いる。普通科長に田中四郎就任（９月）。
1906(明治39)年		普通科寄宿舎完成。
1908(明治41)年		「社団法人東北学院」設置。創立記念日を５月15日に定める。同窓会会報第１号発行。
1910(明治43)年		校旗制定。
1911(明治44)年		創立25周年記念式典挙行。
1915(大正４)年		普通科を中学部と改称（５月・生徒数357名）。中学部長は田中四郎。
1916(大正５)年		『東北学院時報』創刊（１月）。南六軒丁（現大学土樋キャンパス）に専門部校地取得。
1918(大正７)年		専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。

年　代	歴代役職者	事　　項
1919（大正８）年	五十嵐正	仙台大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼（３月）。仮校舎建築（９月）。
1920（大正９）年		中学部長に五十嵐正就任（１月）。
1921（大正10）年		創立35周年記念式典挙行。
1922（大正11）年		中学部校舎再建（６月）〈東二番丁・通称赤レンガ校舎〉。中学部寄宿舎再建。
1923（大正12）年		東北学院教会設立（５月）。
1925（大正14）年		神学科を専門部より分離し、神学部（第１科・第２科）とする。専門部は文科、師範科、商科となる。
1926（大正15）年		南六軒丁に専門部校舎完成（現大学本館）、９月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行（10月）。
1928（昭和３）年		専門部３科とも予科を廃し、４年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成（３月）。
1929（昭和４）年		専門部を高等学部と改称。神学部第２科を廃止、第１科を神学部本科と改称し、３年の予科を置く。「財団法人東北学院」と改組（８月）。
1930（昭和５）年		高等学部師範科に専攻科１年を置く。
1932（昭和７）年		高等学部は３学期制を２学期制に改める。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂完成（３月）。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。
1933（昭和８）年		高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。
1934（昭和９）年	出村悌三郎	神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。
1936（昭和11）年	E.H.ゾーグ	高等学部文科を文科第一部、師範科を文科第二部と改称。創立50周年記念式典を挙行。院長シュネーダー、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第３代院長に出村悌三郎就任（５月）。旧労働会建物および敷地を売却。第３代理事長にE.H.ゾーグ就任（６月）。
1937（昭和12）年		神学部廃止、日本神学校と合同（３月）。高等学部は3年制となる。高等学部長にゾーグ就任（４月）。
1938（昭和13）年	田口泰輔	中学部長に田口泰輔就任（４月）。
1939（昭和14）年		中学部長に出村剛就任（４月）。
1940（昭和15）年		南町通り旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。第４代理事長に出村悌三郎就任（10月）。
1941（昭和16）年	小泉要太郎	高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任（４月）。
1942（昭和17）年		高等学部商科第二部および中学部第二部を設置（ともに夜間）。
1943（昭和18）年		高等学部商科を高等商業部、中学部を東北学院中学校と改称。中学校長に出村悌三郎院長が兼務（４月）。

年　代	歴代役職者	事　　項
1944(昭和19)年	宮城音五郎	航空工業専門学校設置。航空工業専門学校長に宮城音五郎就任（４月）。第５代理事長に杉山元治郎就任（６月）。
1945(昭和20)年		中学校長に出村剛就任（４月）。航空工業専門学校を工業専門学校と改称（12月）。中学校校舎空襲により焼失。
1946(昭和21)年	杉山元治郎	高等商業部および同第二部を廃止（３月）。東北学院専門学校（英文科・経済科）および同第二部を設置。第４代院長に出村剛就任。中学校長に月浦利雄就任（４月）。専門学校長に出村剛就任（４月）。
1947(昭和22)年		工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造２階建４教室増築完成。第６代理事長に鈴木義男就任（７月）。
1948(昭和23)年	出村剛	新制高等学校、同第二部を設置。月浦利雄同高等学校長ならびに中学校長兼任（４月）。専門学校長に小田忠夫就任（４月）。
1949(昭和24)年		東北学院専門学校から新制大学に昇格。東北学院大学文経学部（４年制、英文学科・経済学科）を設置。小田忠夫初代学長に就任。東九番丁寄宿舎完成。
1950(昭和25)年	月浦利雄	専門学校二部を東北学院短期大学部（２年制、英文科・経済科）と改称。第５代院長にA.E.アンケニー就任（３月）。
1951(昭和26)年		「学校法人東北学院」と改組。専門学校を廃止。短大別科を設置。第６代院長に小田忠夫就任。中高理科教室鉄筋コンクリート３階建完成。
1952(昭和27)年	鈴木義男	短期大学部に法科を設置。
1953(昭和28)年		中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任（４月）。総合運動場を多賀城に開設。シュネーダー記念東北学院図書館完成（10月）。
1954(昭和29)年	A.E.アンケニー	多賀城第２寄宿舎完成。
1955(昭和30)年		創立70年記念式典挙行。中学校校舎鉄筋コンクリート３階建９教室完成。『東北学院創立七十年写真誌』を刊行（５月）。在米同窓生、創立70年記念として鐘を寄贈（12月）。蔵王にＴＧヒュッテ「栄光」完成。
1956(昭和31)年	小田忠夫	中学・高等学校体育館完成（３月）。W.E.ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立（４月）。大学音楽館完成（10月）。
1958(昭和33)年		中学校赤レンガ校舎は都市計画により９教室を失う（４月）。中学・高等学校鉄筋コンクリート造４階建８教室完成（４月）。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成（９月）。
1959(昭和34)年	五十嵐正躬	中学高等学校一本化、中学校長に月浦利雄高等学校長兼務（１月）。短期大学部を東北学院大学文経学部二部（英文学科・経済学科）に改組。高等学校榴ケ岡校舎を開設。『東北学院七十年史』を刊行（７月）。大学研究棟鉄筋コンクリート造４階建完成（９月）。自然科学研究室青根分室を開設（10月）。
1960(昭和35)年		短期大学部を廃止（３月）。
1961(昭和36)年		文経学部英文学科に専攻科を設置。
1962(昭和37)年		多賀城町（現多賀城市）に東北学院大学工学部（機械工学科、電気工学科、応用物理学科）を設置。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長に小田忠夫院長が就任（４月）。

年　代	歴代役職者	事　　項
1963（昭和38）年		押川記念館完成（２月）。工学部寄宿舎開設。大学オーディオ・ヴィジュアルセンター完成。野間記念剣道場完成（７月）。第７代理事長に杉山元治郎就任（９月）。
1964（昭和39）年	山根篤	東北学院大学文経学部一部・二部を文学部一部・同二部および経済学部一部・同二部に改組。大学院文学研究科英語英文学専攻修士課程を設置。大学64年館完成（10月）。第８代理事長に山根篤就任（11月）。
1965（昭和40）年		東北学院大学法学部（法律学科）および大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を設置。宮城郡泉町市名坂字天神沢（現仙台市泉区天神沢）に10万坪の校地を取得（５月）。同窓会にＴＧ十五日会発足（５月15日）。工学部４号館完成（10月）。中学校新校舎、中高礼拝堂完成（11月）。大学土樋寄宿舎完成。
1966（昭和41）年		大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻修士課程を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成（６月）。大学泉寄宿舎完成。青根セミナーハウス完成。
1967（昭和42）年		工学部に土木工学科を増設。大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を経済学研究科経済学専攻修士課程に改組。大学67年館完成（５月）。中学・高等学校向山寄宿舎開設。中学・高等学校運動部室完成（３月）。
1968（昭和43）年		大学院経済学研究科経済学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻博士課程を設置。工学部５号館・６号館完成（３月）。大学新研究棟68年館完成（８月）。中学・高等学校弓道場完成（３月）。『東北学院大学学報』第１号創刊。
1969（昭和44）年		第９代理事長に月浦利雄就任（３月）。工学部旭ケ丘寄宿舎開設。
1970（昭和45）年		工学部校地に東北学院プール完成。
1971（昭和46）年	二関敦	大学院工学研究科機械工学専攻修士課程、電気工学専攻修士課程を設置。倉石ヒュッテ完成。中学高等学校長に二関敬就任（９月）。榴ケ岡高等学校長に五十嵐正躬就任（９月）。大学文団連棟焼失（９月）。
1972（昭和47）年		榴ケ岡高等学校として独立（４月）。高山セミナーハウス完成（７月）。泉市市名坂（現仙台市泉区市名坂）に榴ケ岡高等学校校舎が完成移転（８月）。榴ケ岡高等学校体育館完成（12月）。
1973（昭和48）年		東北学院同窓会館完成（４月）。米国アーサイナス大学に第１回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舎完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任（7月）。
1974（昭和49）年		大学院工学研究科機械工学専攻博士課程および電気工学専攻博士課程設置。第10代理事長に小田忠夫就任（3月）。
1975（昭和50）年		大学院法学研究科法律学専攻修士課程設置。大学67年館増築完成（６月）。
1976（昭和51）年	田口誠一	創立90周年記念式典挙行。
1977（昭和52）年		中学・高等学校長に田口誠一就任（４月）。榴ケ岡高等学校長に小田忠夫院長兼任（４月）。
1978（昭和53）年	清水浩三	大学90周年記念館完成（２月）。榴ケ岡高等学校長に清水浩三就任（４月）。中学・高等学校赤レンガ校舎、宮城県沖地震のため一部倒壊（６月）。ＴＧヒュッテ焼失（８月）。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂（土樋キャンパス礼拝堂）に新パイプオルガンを設置（11月）。
1979（昭和54）年		大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程を設置。工学部計算センター完成（３月）。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式（３月）。大学78年館および部室棟完成（９月）。ＴＧヒュッテ再建（10月）。東北学院展開催（十字屋仙台店・10月）。

年　代	歴代役職者	事　　項
1980(昭和55)年		中学・高等学校シュネーダー記念館完成（３月）。工学部機械工場および機械実験棟完成（３月）。榴ケ岡高等学校礼拝堂及び北校舎完成（８月）。泉校地総合運動場および管理センター完成（９月）。中学・高等学校文化部室完成（９月）。
1981(昭和56)年		大学81年館完成（３月）。『東北学院報』発刊（東北学院大学学報を改称）（４月）。情報処理センター設置。総合運動場プール完成（５月）。榴ケ岡高等学校第１回海外研修（８月）。工学部体育館完成（10月）。
1982(昭和57)年	情野鉄雄	米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。第７代院長・第２代大学長に情野鉄雄就任（４月）。第11代理事長に児玉省三就任（４月）。図書館工学部分館完成（11月）。
1983(昭和58)年		高校第二部廃止（３月）。榴ケ岡高等学校校舎増築完成（３月）。工学部礼拝堂完成（10月）。
1984(昭和59)年	児玉省三	新シュネーダー記念図書館完成（11月）。中学・高等学校第１回海外研修（７月）。
1985(昭和60)年		大学整備計画案（教養部泉校地移転など）公表（１月）。旧シュネーダー記念東北学院図書館を大学院校舎に改装（11月）。幼稚園新園舎完成（12月）。
1986(昭和61)年		創立100周年記念式典挙行。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ケ岡高等学校北校舎増築完成（３月）。
1987(昭和62)年	宗方司	中学・高等学校長に宗方司就任（４月）。榴ケ岡高等学校長に半澤義巳就任（４月）。中学・高等学校体育館武道館完成（12月）。
1988(昭和63)年		大学泉キャンパス完成、大学教養部を移転。榴ケ岡高等学校礼拝堂増築完成（３月）。幼稚園長に橋本清就任（４月）。
1989(平成元)年	半澤義巳	泉キャンパスに教養学部（教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻）を設置。幼稚園長に新妻卓逸就任（４月）。『東北学院百年史』発刊（５月）。
1990(平成２)年		大学院工学研究科土木工学専攻修士課程を設置。
1991(平成３)年	武藤俊男	多賀城キャンパス１号館完成（３月）。榴ケ岡高等学校部室棟完成（３月）。中学・高等学校長に武藤俊男就任（４月）。中学・高等学校社会科教室完成（７月）。
1992(平成４)年		大学院工学研究科土木工学専攻博士後期課程を設置。榴ケ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成（４月）。第12代理事長に情野鉄雄就任（６月）。
1993(平成５)年		工学部２号館完成。中学・高等学校移転決定（３月）。
1994(平成６)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻修士課程を設置。
1995(平成７)年	倉松功	榴ケ岡高等学校を男女共学制に移行。第８代院長に田口誠一就任。第３代大学長に倉松功就任（４月）。
1996(平成８)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻博士後期課程を設置。榴ケ岡高等学校家庭科実習棟完成（２月）。榴ケ岡高等学校長に脇田睦生就任（４月）。榴ケ岡高等学校第１回ホームカミングデー実施。
1997(平成９)年	脇田睦生	大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻修士課程、アジア文化史専攻修士課程を設置。工学部運動場等新設。
1998(平成10)年		幼稚園長を田口誠一院長が兼務（４月）。高山セミナーハウス閉鎖。

年　代	歴代役職者	事　　項
1999（平成11）年		大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻博士後期課程、アジア文化史専攻博士後期課程を設置。大学設置50周年記念式典を挙行。青根セミナーハウス閉鎖。第13代理事長に田口誠一就任（４月）。
2000（平成12）年	 出原荘三	文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部二部英文学科と経済学部二部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任（４月）。土樋キャンパス８号館（押川記念ホール）・体育館完成（９月）。ホームカミングデー（同窓祭）開始。大学設置50周年記念事業（講演会・シンポジウム・シンボルマーク決定）を実施。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得（３万１千坪）。
2001（平成13）年	 杉本勇	文学部基督教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻に改称（４月）。東北学院資料室開設（５月）。東北学院シーサイドハウス完成。
2002（平成14）年	 赤澤昭三	工学部機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学科を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科にそれぞれ改称。大学院経済学研究科に経営学専攻修士課程を設置。中学・高等学校長に出原荘三就任。榴ケ岡高等学校長に杉本勇就任（４月）。
2003（平成15）年	 星宮望	第14代理事長に赤澤昭三、第９代学院長および同窓会長に倉松功就任（４月）。幼稚園長に長島慎二就任（４月）。東北学院同窓会100周年記念式典挙行（11月）。
2004（平成16）年	 松本芳哉	法科大学院・総合研究棟完成（２月）。第４代大学長に星宮望就任（４月）。中学・高等学校長に松本芳哉就任（４月）。大学院法務研究科法実務専攻専門職学位課程（法科大学院）を設置（４月）。榴ケ岡高等学校校舎増築（４月）。
2005（平成17）年	 久能隆博	中学・高等学校新校舎完成（仙台市宮城野区子鶴）（１月）。東北学院同窓会館閉館（３月）。文学部史学科を歴史学科に、教養学部教養学科人間科学専攻、言語文化専攻、情報科学専攻を教養学部人間科学科、言語文化学科、情報科学科に改組し、教養学部地域構想学科を新設（４月）。
2006（平成18）年	 永井英司	工学基礎教育センター完成（３月）。工学部機械創成工学科を機械知能工学科に、物理情報工学科を電子工学科に、環境土木工学科を環境建設工学科に改称（４月）。榴ケ岡高等学校長に久能隆博就任（４月）。創立120周年式典挙行（５月）。
2007（平成19）年	 平河内健治	中学・高等学校新寄宿舎完成。ハイテク・リサーチセンター完成（３月）。第10代学院長に星宮望就任（４月）。中学校・高等学校長に永井英司就任（４月）。秋田オープンキャンパス開催（７月）。多賀城市との連携協定締結式（11月）。
2008（平成20）年		第15代理事長に平河内健治就任（６月）。榴ケ岡高等学校体育館・管理棟完成（９月）。教養学部創設20周年記念式典挙行・同窓会設立。
2009（平成21）年		経済学部経営学科を経営学部に昇格、経済学部に共生社会経済学科を新設（４月）。大学院経営学研究科（修士課程）を設置（４月）。幼稚園長に平河内健治兼任（４月）。榴ケ岡高校創立50周年記念式典挙行（11月）。東北学院大学博物館オープン（11月）。
2010（平成22）年		バイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟を開設（３月）。
2011（平成23）年		文学部を改組し、総合人文学科を新設。文学部キリスト教学科は募集停止（４月）。幼稚園長に佐々木勝彦就任（４月）。

資料室利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

開室時間

授業期間中

月～金　10：45～16：00
土　　10：45～12：00
（日・祝祭日は閉室いたします。）

長期休暇（夏休み・冬休み・春休み）中

月～金　10：00～15：30
（土・日・祝祭日は閉室いたします。）

学校法人 東北学院

発行日　2012（平成24）年4月1日
編　集　東北学院資料室運営委員会
発　行　学校法人 東北学院
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL.022-264-6423　FAX022-264-6478
http://www.tohoku-gakuin.jp/
印　刷　東北堂印刷株式会社